
王妃の秘密

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃の秘密

【Nコード】

N3190W

【作者名】

睦月

【あらすじ】

この1年幸せな夫婦だった。だけど、ずっと心の引っかかっている事があった。あなたを騙していること。そして、子供が中々出来ない私達の間にも側室をとという声によって、私たちの関係は変化していく。

01 (前書き)

さて、ひとつ連載が終わりましたので、新たな連載を始めました。
お時間があるときに覗いてみてください。

これだけは……。
これだけは、あの人に知られてはいけない。

「ジュリア様。支度が整いました」

侍女のエリーナが私を鏡の前に座らせる。

「ありがとうございます。さすがエリーナね。今日もとても綺麗に仕上がっているわ」

鏡の中の自分を見てるとまるで別人だった。

「……ジュリア様。そんなにお気になさらなくても宜しいのでは
ありませんか？」

鏡越しに私をみて言うエリーナに私は苦笑する。

「ダメよ。だって、あの子は美しい女性が好きなんだもの」

あの人。

それは、私の夫であり、この国の国王であるクラウド・エルステラ。

「しかし、ジュリア様、ここまでしなくても貴方は十分お綺麗ですわ！」

毎度のことながら、エリーナのお世辞に私はいつも救われる。

「……ありがとう。嘘でも嬉しい」

これも、毎度の返事だ。

何を言っても聞かない私に諦めたのか、肩を落とすエリーナにいつもこんな事を言わせて申し訳ないと思いつながら部屋を後にする。

エルステリア国、王妃ジュリア・エルステラ。

それが今の私。

1年前、この国に嫁いできた。

4つの大きな大陸があるうち一番大きな大陸ユーージニア。その中でも一番の大国が我が国だ。

そして、私の祖国はユーージニアの中でも最も平和な国とされていた。争いもなく、自然の多い土地だった。そんな土地に来て私を見染めて下さったのが私の夫だ。

だけど、あの時は……。

いけない。またあの時の事を考えてしまった。

もう、結婚した以上どうしようもない事だもの……。

首を振る私に、エリーナが声をかけた。

「ジュリア様。着きましたよ？」

ふと、その言葉に顔を上げて見れば目の前には重厚な扉。

「国王がお待ちです」

そう言つて扉が開けられた先に私は一人で入っていく。

「クラウド様」

机に向かつて仕事をしている夫に声をかける。

「ジュリアか。そこに座つて待つていてくれ」

そこと言われたのが、いつものソファだと言う事は心得ている。

これも毎日言われる事だ。

夫、クラウドとはいつも午後のお茶を共にする。

これは別に決まりがあつてしているわけではないのだが、新婚当初私に気を使つてくれたクラウドが誘つてくれて以来、毎日の日課となつてしまった。

「待たせたな」

ふと顔をあげると向かい合つて座る夫の姿。

「いいえ。お仕事ご苦労様です」

クラウドに用意してあつたお茶を差し出す。

それをクラウドはにっこり笑つて受け取る。

こんななんでもない事が今の私には最大の幸せだった。

「……ジュリア」

一口カップに口をつけたかと思うと、クラウドは俯き気味に話し始めた。

「近いうち、側室を設けることになるかもしれない」

その言葉に私は一瞬固まった。

結婚して1年。

夫婦の契りはあるもののなかなかできない跡継ぎに重臣たちが苦言していたことは知っていた。

「……そ、そうですか」

なんでもないふりをしたかったが、さすがに動揺を隠せなかった。

「これ以上跡継ぎが出来ないのならばと、どうしても断り切れなかった。すまない」

クラウドは申し訳なさそうに頭を下げる。

「……いいえ。謝らないで下さい。私に子供が出来なのが悪いのです」

なぜだろう。2人とも問題があるわけでもないのに子供が出来ないのは……。

「ジュリア！私がかから愛しているのはお前だけだ！たとえ側室が来ようと私は側室の元へ渡ることはしない！」

クラウドは私の手を握りそう言った。
しかし、そんなことが出来るはずがない事はわかっていた。

「・・・お気持ちだけで、私は嬉しいですわ。この国の為に、子供は必要です。私が子を生して差し上げられないのですから、そんな事はおっしゃらないでください！」

本心ではなかった。

しかし、私たちはただの夫婦ではない。

国を背負う国王と王妃なのだ。

例え、自分の夫が他の女を抱こうとも私はそれを許さなければならぬ立場なのだ。

「・・・ジュリア・・・」

私よりも泣きそうになっているクラウドに苦笑しながら、私たちは恒例のティータイムを終えた。

クラウドの執務室を出ると私はすぐに部屋へと戻る。

まだ泣いてはいけない。

どこで誰が見ているのかわからないのだから。

部屋へ戻るまで私は王妃の笑顔を顔に張り付けたまま廊下を優雅に歩く。

すれ違う侍女や従者達に笑みを振りまき、その笑顔に悲しみなどに
じませずに・・・。

部屋に入ると私はベットにうつ伏せた。

我慢していた涙をぼろぼろとシートへと落とす。

一緒に化粧まで落ちるものだから、今の私の顔はひどいことだろう。そこに、扉からノックの音が聞こえる。

「ジュリア様？エリーナでございます。入ってもよろしいですか？」

扉の向こうから聞こえた声はエリーナだった。

「……入室を許可するわ……」

エリーナ以外の人にこんな顔は見せられない。

エリーナは私が祖国にいた時から私についていた侍女だった。

「失礼します。……まあまあ。どうなさったのです？」

私の酷い顔を見て驚いているのか、泣いているから驚いているのか。どちらにしてもさほど驚いてはいないエリーナに私は、先程の話をした。

「……そうですか。ご側室が……」

それだけ言うとエリーナは目を伏せた。

話をする間、エリーナに化粧をとってももらっていた為、再び私は鏡の前に座っている。

「……でも、良かったのかもしれない。これを機に私は王妃の座を降りたほうが……」

鏡の中の人物は先程までいた人物とは全くの別人だった。

「まあ！そんな事ありませんわ！！クラウド様はジュリア様の事を
とつても愛していらっしゃるではありませんか！側室が来られたか
らと言ってジュリア様が王妃を辞める必要がどこにあるのですか！
」！

エリーナはそう言うが、元々私はここにいることが間違っていたの
だ。

それならば、相応しい人がここに来るべきだと思った。

そう……。

すべては1年前のあの日から間違っただけに……。

「ジュリア！私たちそっくりだと思わない！？」

姿は愛らしく、声は天使が喋っているのではないのかと間違っほど透き通った声で私に話しかけるのは祖国の王女リアーシャ様。

「そんな！恐れ多いですわ！！」

思い切り首を横に振るのが私、トルファ大公爵令嬢ジュリア。昔から、父に付き添って王宮へと足を運んでいるため、同じ年のリアーシャ様とは仲もよく友達のように接してもらっていた。

「あら！だって髪の色も瞳の色だって同じでしょう？それに、私たち顔のパーツもそっくりなのよ？」

あかるくにつこり笑うリアーシャ様。姿だけでなくお心まで綺麗な方。

「リアーシャ様。この国の者ならほとんどが髪の色も瞳の色も一緒ですわ。パーツは似ていてもお顔立ちが違えばお顔は全然変わってきますよ？」

くすくすと笑いながら、楽しい一時を迎えていた。

そこは王宮の一角の庭だった。

それも王宮の入口に近い……。

遠くでそれを見ている人たちがいたなんて全然気付きもしなかった。

「あそこにいる可憐な女性たちは誰だ？」

その当初、仕事で祖国に訪ねて来ていたクラウス様が近衛に聞いた。

「ああ、あれはたぶんこの国の王女と大公爵様のご令嬢でしょうね」

その時私たちは花の冠を作っていた。

そして、それを持っていたのはリアーシャ様。

「あの、花を持っている方はどちらだ？」

その時、リアーシャ様は私にその冠を被せてくれた。

そして、近衛はクラウス様に向けていた視線をこちらに向けて言ったのだ。

「あれは大公爵様のご令嬢です」

その時、クラウス様はリアーシャ様に釘付けで、近衛が自分の方を見ていたなど思ってもいなかったのだろう。

そして、近衛はリアーシャ様の手から私に花冠が移ったところなど見ていなかったのだろう。

ありとあらゆる偶然で、クラウス様は自分の惚れた相手の名前を間違っ覚えてしまった。

そして、そのままクラウス様は我が公爵家にやってきて、私を王妃にと申し出たのだった。

なぜ、それがわかったかつて？

それは、初めてお会いした時にわかりました。

「・・・なんだが、庭でお見かけした時とイメージが違うようすが・・・」

初対面でそんなことをいうクラウド様もどうかと思うのですが、根が素直な方なので思わず口から出てしまったのだろう。

「・・・いつのお話ですか？」

私が尋ねると、クラウド様は教えてくれた。

それはリアーシャ様とおしゃべりをしていたあの時だと。

そして、手にもつ花冠がとても似合っていたと。

私は、リアーシャ様に花冠を被せられ、そのままできて、というリアーシャ様のお言葉通り、王宮に入るまで頭の上に花冠があった。

そこで、ハツと思った。

これは、もしかして勘違いされているのではないかと。

他国の王様にそれを指摘するのもどうかと思い私は父に相談したら、父はそれを黙っていると聞いた。

この結婚で友好関係が築けるのだと。それも、願ってもいない大國と。

「しかし、王様を騙すことになりますわ！」

父の言うこともわかるのだが、クラウド様が恋い焦がれたのはリアーシャ様だった。

「・・・お前はリアーシヤ様の幸せを奪うのか？」

父は私を一睨みするとそう言った。

リアーシヤ様の幸せ・・・。

その頃、すでにリアーシヤ様は想い合っている婚約者がいた。

なんだかんだあったのだが、無事2人は想いが通じ今は幸せの絶頂期だった。

「・・・そんなこと・・・」

したいと思う訳ない。

リアーシヤ様のあの笑顔を奪うような真似は・・・。

「だが、リアーシヤ様の婚約者とエルステリア国の国王。どちらが力が上かわかっているだろうか？」

父は暗に私が断ればリアーシヤ様の笑顔を奪う結果になることを仄めかした。

そして、私に残された道が一つということも・・・。

クラウド様を騙すことはすごく心苦しかったのだけれども、リアーシヤ様の幸せには変えられなかった。

そして、私はリアーシヤ様が言っていたように、似通ったパーツを駆使して化粧でリアーシヤ様に近づけるよう誤魔化したのだった。

結婚してからのクラウド様はとても優しくかった。

あの時の女性が私だと思っっているからだろうか？

側にいて、私はクラウド様にどんだん惹かれていった。

そして、この人の妻になれて心の底から喜んだ。

だけど、神様っているんだろうか。

私たちの間には全くと言っていいほど、子供ができる兆候が見られなかった。

「やはり、悪い事って出来ないものよね」

事情を知っているエリーナはなんとも言えない顔でこちらを見ていた。

「しかし、クラウド様は現在のジュリア様を愛していらっしやると思いますよ？」

エリーナの気持ちは嬉しかったが、それは違うと私は思っていた。

「そうね、確かにクラウド様は愛して下さっているわ。でも、それはリアーシャ様の真似をしている私を愛してくださっているのよ。つまり、本当の私を愛して下さっているわけではないのよ」

苦笑気味に笑う私にエリーナは困った顔を見せた。

エリーナを困らせるつもりじゃない。

だけど、私が耐えられなくなってきたのだ。

本当の私ではないジュリアを愛しているクラウド様に。

本当の私を見てほしいと思う私のわがままに。

「・・・そんなことないと思います・・・」

泣きそうな顔をしているエリーナに私は苦笑する。

「あなたが泣かなくてもいいのよ？これは始めから解っていたことだもの」

そう。初めから解っていた。

私が彼に惹かれる事も、そして、彼が本当の私を愛してくれないことも。

「だからね、私もそろそろお役御免をしようかと思ったのよ」

リアーシャ様の代わりになる事はもう疲れきってしまった。

そこに新しい側室がくる話。

愛している人の子供がいれば違ったのかもしれない。

だけど、この一年、私のもとに彼の子供が宿ることはなかった。

その上、他の女の人の元に通って、その人と子供を成す。

そうなったら、私の心は壊れてしまつかもしれない。

そんなところを見たくなかった。聞きたくなかった。

だから、私は逃げることに決めた。

「・・・しかし、クラウド様が許して下さいるでしょうか？」

・・・そこは頭を抱えるところだった。

王族の離縁はそう簡単に行かない。

国王となればなおさらだ。

もし、離縁が出来ないのであれば、せめて、この王宮から離れたかった。

「とにかく、私、明日話してみるわ」

「……ならん」

内心はやはりと思いながらどうしても肩を落とさずにはいられなかった。

今日も午後からいつもの通りクラウド様の執務室を訪ね、仕事の合間にお茶をしていた。

「ジュリア、私を信じてくれないのか？」

悲しそうな眼を私に向けてくる。

「いいえ……。クラウド様の事は信用しております。……私がいけないのです。私には側にいて他の女性の元へ通うあなたを見ることができないのです。少しの間で構いません。どうぞ私をフィーナ国の城へ移していただけられないでしょうか？」

涙を浮かべクラウド様に懇願した。

離縁を申し出てすぐに許されるなど思っていない。

「……ジュリア……」

クラウド様は悲しそうな顔をしたまま少し考えていた。

「……それならば、1カ月……休養という名目で許可しよう……」

「……よろしいのですか？」

1カ月……。期間は短い、今の私には彼と距離を置くことが必要だった。

「……よくはない……。しかし、こうなってしまったのは私の不甲斐なさのせいでもある。ジュリアの心が軽くなるのならそれもいいだろう……」

そして、私の隣に座ると、そっと私の手をとった。

「ただし、必ず私の元へ帰ってくるのだよ？」

その瞳は力強く、人を従える輝きを放っていた。

「……はい……。わがママを聞き届けて下さってありがとうございます」

手を繋がれたままそう言うと、クラウド様は私の額へキスを落としました。

「ジュリア。なにがあるかと私はお前を手放すつもりはないからね」
瞼の上ポツリとそう言うクラウド様に私の心がときめいた。

「……これは、リアーシャ様に向かって言っている事と同じなのに……」
それでも、ときめいてしまう私は重傷なのだろう。

「……執務中お邪魔して申し訳ありませんでした」

これ以上ここに居たら離れがたくなってしまふ。

私は早々に部屋を後にしようとした。

だが、私が扉に手をかけた時、クラウド様が私の腰を引きよせ強引に唇を奪う。

塞がれた口。

ふと視線を上げると強い瞳と目が合う。

唇が開放されるとクラウド様はニツコリと笑った。

「ジュリア。気をつけて行ってきなさい」

突然の出来事に、つぶやくようにしか返事ができなかった。

そして、私はその部屋を後にしたのだ。

いつもより少し強引な口づけに、思わず私は左手で唇に触れた。

「……クラウド様……」

自然と彼の名前がこぼれる。

ふと、廊下の向こうから侍女が歩いてくるのが見えた。

私は無意識のうちにスツと背筋を伸ばし王妃の仮面をかぶった。

1年。こうして私は彼にふさわしくあるようと努力した。

そしてそれはすでに身についてしまっていた。

私を見つけた侍女はスツと廊下の端によって頭を下げる。

そのたびに思う。

……私なんかに頭を下げないで……

下げられるような立場ではないのに。

だけど、こんな事も今日が最後かもしれない。

そう思うと、思わず言葉がこぼれていた。

「いつもご苦労様。ありがとうございます」

私から、声をかけられるとは思っていなかったのだろう。当然だ。いつもならスツと通りすぎるだけなのだから。

侍女は目を見開いて固まっていた。

そんな彼女がおかしくて、思わずくすりと笑うと、侍女は覚醒したのか慌てて頭を下げた。

「も、もつたいないお言葉・・・」

そう言った彼女に、感謝の気持ちを込めにつこりと笑い掛けその場を後にした。

そして、部屋に戻った私は早速エリーナと共にフィーナ国へ行くための準備を始めた。

「エリーナ、持っていくものは必要最小限でいいわ。クラウド様から貰った物は置いていきましょう」

それらを持って行ってしまおうと別れると決めた決心が揺らいでしまうことが目に見えている。

「わかりました・・・。しかし、本当にいいのですか？」

「・・・いいの。もともとここは私のいる場所じゃなかったのよ」

荷物をまとめる手がつい止まってしまった。

本当はずっとクラウド様と一緒に居たかった。

「ジュリア様・・・クラウド様に本当の事を打ち明けては・・・？」

エリーナは恐る恐る私にそう提案する。だけど・・・。

「それはダメよ。いくら、クラウド様に求婚されてやってきたからととっても、私は我が祖国の名を背負ってやってきたのよ。こんな事がバレてしまったら国にも迷惑がかかってしまうわ。私一人の事じゃないもの」

そう、これは誰にもバレてはいけない。

「・・・側室となられる方が素敵な女性であることを願いましょう」

そうすれば、私は離縁を申し渡されるだろう。

子供も成さぬ王妃など必要ない。

「ジュリア様・・・」

目を伏せるエリーナに気付かないふりをして私は荷物をまとめた。

「・・・クラウド様が幸せになる為に私が側においてはいけないのよ・・・」

すべては偶然が重なった勘違いから始まった。

そのことに便乗して、私はずっと愛する人を騙している。

その上、王妃として一番大切な跡継ぎを産むことすらできない。

こんな私がクラウド様の側にいて何が出来るというのだろうか。

側室が来るという話はきっかけに過ぎない。

そろそろクラウド様を解放して差し上げないといけない。

そんな思いがずっと心に引っかかっていたのだ。

「やっと、クラウド様を解放して差し上げられます・・・」

詰め終わった荷物を見て私はエリーナに聞こえないよう小さな声で
呟いた。

次の朝、まとめた荷物を馬車に積み込むとすぐに城を出発した。

「よろしいのですか？国王様にご挨拶しなくて・・・」

エリーナは心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「・・・いいのよ。ちゃんと言伝はしているわ。彼は忙しいもの。私のわがままに付き合わせるわけにはいかないわ」

それは建前だった。

クラウス様の顔を見てしまうと決心が鈍りそうだった。

「・・・ジュリア様」

エリーナは何か言いたそうだったがそれ以上は言葉にしなかった。

「やっと着きましたね！」

馬車に揺られる事2週間。エリーナは馬車から下りると思い切り背伸びをした。

しかし、すぐに私が下りる為の台を用意した。

「ありがとう」

その台を使って下りる私は、久しぶりに訪ねたフィーナ国の緑の多さに祖国を思い出す。

「結婚してすぐに訪れて以来だわ・・・」

あの時は、エルステリア国に嫁いだばかりで何もかもがすべて新しく、覚えなければいけないことがたくさんあった。嫁いだ身として、祖国に迷惑をかけないよう、エルステリア国に恥をかかせないよう必死でそれらを覚えようとしていた。

そんな私を見かねてか、クラウド様がここへ連れて来てくれたのだった。

「・・・思えば、あれから私はクラウド様に惹かれていったのよね・・・」

うっとりと思い出に浸ってしまい再び胸の奥が疼いた。

「・・・忘れる為に来たの・・・」

軽く頭を振り、今までの思い出は心の奥にしまいこんでしっかりと前を見つめ、城へ入った。

「ジュリア様。ご到着されたばかりでお疲れでしょうが、明日こちらの国王様の元へご挨拶へと訪れていただきます」

部屋に入るなり、エリーナはそう言った。

フィーナ国の一角に我がエルステリア国の領土があり、この城もそこに立っている。

管理はもちろんエルステリア国の者が行っているが働いている者は
フィーナ国の者が多い。

その上、こちらに住むとなると色々と迷惑をかけることになる為、
挨拶はしておかなければならない。

「そうね……。こちらでしばらくお世話になることですし挨拶に
は行かなければいけないわね」

エリーナの言葉に同意すると、早速エリーナは明日の謁見許可を頂
く！と、張り切って部屋を出て行ってしまった。

今回はまだエルステリア国の王妃としての訪問だ。

「……クラウス様の恥にならないようにしなくては……」

いくら、忘れるとはいえ他国との友好関係や施政に私事で迷惑をか
けるわけにはいかない。

まだ王妃の立場でいる以上するべきことはちゃんとしよう。

そう心に決め、今はとにかく目の前の荷物を解くことを始めた。

今回、侍女はエリーナしか連れてこなかった。

だから、荷物を解く事も出来ることであれば自分でやるつもりだっ
た。

だが荷物に手をかけた時、扉からノックの音が聞こえた。

「……誰？」

エリーナはさっき部屋を出たばかりだ。さすがにこんなに早く帰っ
てくることはできない。

ふと、首をかしげながら問いかける。

「……アルバート・バーンズに御座います」

その名前を聞いて、私は頭の中の記憶をたどった。
いや、そんな事をしなくてもすぐに思いついた。

「ぶっぞ」

声をかけ自らの手でドアを開ける。

「ご無沙汰しております。王妃様」

扉の前で深々と頭を下げるのは、エルステリア国第2騎士団団長アルバート・バーンス。

「・・・アルバートが今回の私の護衛ですか？」

無意識のうちに低くなる声のトーンに自分でも驚いた。

「はい。国王様より申し遣って参りました」

「・・・何も、アルバートを寄越さなくてもいいだろうに・・・。
思わず顔をしかめてしまう。」

「あなたの様な優秀な方が私の護衛ですか？もっと他の方がいるでしょう・・・。」

わざわざクラウド様の片腕と呼ばれたアルバートを私につけなくても。

「・・・恐れながら国王様はとても心配されておいででした。王妃様を一人には出来ない。国王様も時間が取れ次第こちらへ訪れる

そうです」

アルバートの言葉に耳を疑った。

クラウド様がここに来る!?

「クラウド様がそうおっしゃられたのですか!？」

思わず聞き返してしまう。

「……はい。そう伺っておりますが……?」

私の驚きようにアルバートは不思議そうに私を見ていた。ただ、そんな事が気にならないくらい私は驚いていた。

そんな事をされたのでは、いつまでたってもこの気持ちに蹴りがつけない。

大体、先日のティータイムの時にそんな事は一言も言ってなかった。それに、側室の方はどうするつもりだろう?

側室を招き入れておいて、その方を放っておくなどありえない。

「……クラウド様は何をお考えに……」

思わず目の前が真っ暗になる。

ふらりとふらついた私をアルバートがさかさず支えてくれた。

「王妃様!大丈夫ですか!？」

「……大丈夫よ。ちょっと目眩がしただけ。少し休めば良くなります。悪いけど一人にしてくださいますか?」

そう言うと、アルバートは心配そうに私を見ながら一礼してその場

を後にした。

扉を閉め、ベットへ腰かける。

「……そんなに……………」

そんなに、リアーシャ様を愛しておられるのだろうか。

それならば……………」

それならば、なぜ一目見て気付かないの!?

どうして、あの時「違う!」と言って下さらなかったの!

初めてお会いしたときに、「お前じゃない!」そう言って下されば

私だってこんな辛い思いすることなかったのに……………」

「……………私、最低ね……………」

自嘲気味に笑う私。

ここ最近ずっとそんな思いが浮かんでいた。

でも、彼が悪いのではない。

リアーシャ様の幸せを願って私が自ら決めたこと。

エルステリア国を離れてもまだ、心は晴れなかった。きつと、昨日アルバートがあんな事を言ったせいだろう。

「ジュリア様！ やつと……」

鏡の前に座る私をみて、エリーナは涙ぐんでいた。

「泣かないで、エリーナ」

苦笑しながらもエリーナを慰める。

「すみません……。つい、感激してしまつて……」

エリーナの苦労を思えば感激するのも解らなくないが、そんなに泣く程大変な想いをさせていたのだろうか？

「……なんだか、久しぶりに本当の自分の姿を見たようだわ」

鏡に映っているのはリアーシャ様の真似をした私ではなく、本当の姿の私。

遠くから見る分にはたいして差がないように見えるかもしれないが、近くで見るとやはり今までの自分とは別人だった。

「……やっぱり、リアーシャ様の様な美しさはないわね」

ぼつりと言った言葉をエリーナは聞き逃さなかった。

「そんな事ありませんわ！！大きな眼もとには気品が漂い、スツと通った鼻筋は形も良く、思わず口付けしたくなるような唇。お顔全体からジュリア様のお心の優しさが現われてますわ！！」

あまりの勢いに再び苦笑するものの、やはりリアーシャ様の様な美しさはないと思わずにはいられた。

「それに、ジュリア様は綺麗というよりも可愛らしいという言葉がぴったりですわ！」

「……確かに童顔だ。それも、今までは化粧でなんとか誤魔化せてはいたが、やはり元の自分に戻ると幼さが残ってしまう。」

「……私ももう18なのに……」

可愛らしいと言われて嬉しくない訳ではないのだが、18ともなれば十分大人で素直にその言葉を受け入れることは出来なかった。

「さあ、ジュリア様。そろそろ、城を出まさんと約束の時間に間に合わなくなってしまうす」

なぜか、満足したような顔をしてエリーナは扉を開けた。

そんなに、リアーシャ様メイクは大変だったのかと思うとエリーナに申し訳なく思った。

エリーナが、（これこそジュリア様の本当の魅力！今まで隠していたのもつたいたい！男と言う男がジュリア様にメロメロよ！）と思っている事など露知らず……。

「……エリーナ、ごめんなさいね……」

こつそりと謝罪した言葉は、浮かれているエリーナの耳には届かなかった。

「ご無沙汰しております。トレース陛下」

目の前の王座に座っているフィーナ国国王に頭を下げる。

「……ジュリア殿？」

様子を伺いつつ私を見る国王に思わず苦笑いしてしまう。

「はい」

返事をした事で、改めて私を見る国王は少し驚いた様な顔をしていました。

「……しばらく会わない内になんだが随分雰囲気が変わられましたね？……いや、驚いた。すごく素敵だ」

王座から下りて私の傍まで来ると、トレース陛下は私の左手甲に口づけを落とした。

エルステリア国では既婚女性にこのような挨拶をする事はない為、思わず身を固くしてしまった。

「へ、陛下!」

「ああ、失礼。あまりに可愛らしかったので思わずこの手に触れたくなってしまった。確か、エルステリア国ではあまり良しとしないね」

そう言いながらもなかなか離してくれない左手に思わず視線を落とすと、そこに唇をあてたままでこちらをみるトレース陛下と目が合う。

「お戯れがすぎますわ……。私ごときにこのような事をなさっては、陛下にご迷惑がかかります……」

こんな子供の様な私にこんな事をして、陛下が幼子好きなんて噂されては大変だ。

確か陛下のお年は今年で35だ。

リアーシャ様を真似ていない私などせいぜい15、6にしか見えない。そんな子供にこんな事をしたと知れては迷惑がかかってしまう。私は慌てて、トレース陛下から手を引こうとした。

しかし、唇は離れたものの陛下が手を離してくれる気配はなかった。それどころか、手を引こうとした私の手を更に強く握ってきた。

「と、トレース陛下?」

声をかけると、トレース陛下はにっこり笑顔を作った。

「……ジュリア殿。いや、失礼。ちょっとからかいすぎたかな

？」

そういうと、ぱっと手を離し、元いた王座へと戻っていく。からかわれたただけだと知ると、ほっとしたと同時にそれに慌てた自分が恥ずかしかった。

「・・・それで、今回はどうされたのかな？こちらへはどれくらい滞在する予定かな？」

トレース陛下からの質問にハツとし、気を取り直して陛下の質問に答えた。

「はい、今回は休養の為、1か月ほどこちらでお世話になります。その間、フィーナ国の方々にご迷惑をおかけする事となるでしょうが、宜しくお願い致します」

ドレスを摘み淑女のたしなみとして習った礼をする。

「休養？どこかお加減でも悪いのか？」

「いえ・・・、少し王妃業をお休みただいているだけです。お恥ずかしいお話です」

体の調子が悪いとも言えず、ましてや離縁する為に来ましたが言えるはずもなく、おかしくないような言い訳も見つからず、王妃としてあり得ない様な理由を言ってしまった。

「ははは！そうか。そうだな。たまには王妃業も休業しないとやっていられないからな！」

あまりにおかしい理由を笑い飛ばしてくれたトレース陛下にほっと胸をなでおろした。

しかし、こんな事を言ってしまったてクlaus様の恥にはならないだろうか……。

そんな思いがふっと過った。

「では、ジュリア殿。よろしければ明日夕食を一緒にどうかな？この国の名物を用意しよう」

トレース陛下の言葉に我に返ると、あまり気がすすまないながらも無下にお断りする事も出来ず了承してしまった。クlaus様に離縁を納得してもらおう事を考えなければいけないのに……。と思いながら、思わず零れそうな溜息を飲み込んだ。

昨日の登城後は疲れて、片付けが出来なかった。

今日は今日で夕方からまた王城へと出向かなければいけない為、朝からまだ片付いていない荷物をエリーナがせつせと片付けていた。そんな、忙しく動き回るエリーナの手伝いをしようとエリーナに何度か声をかけているのだが……。

「……エ、エリーナ。私も何か手伝えることは……。」

最後まで言わないうちにエリーナに言葉を被せられた。

「ジュリア様は大人しく座っていらしてください」

「……はい」

につこりと笑うエリーナの言葉に頷くしかなかった。ただ、エリーナ一人に働かせるのは心苦しい。

「そうだわ！お茶の準備くらい……。」

私の言葉を聞くや、クローゼットにいたエリーナが慌ててそこから出て来た。

「ジュ、ジュリア様！お茶なら私が！！お願いですから、大人しくそこに座っていてくださいい！！」

なんだか、泣きそうな声でそういうエリーナに思わず首を縦に振ってしまった。

それを見たエリーナは心底安堵したように笑顔をこぼし、窓際にあるソファに腰をかけるよう勧めた。

ソファに腰をかけたものの、せわしなく動くエリーナを見てやはり何かできないだろうかと思案してしまふ。

「……エリーナばかりに負担をかけてしまって申し訳ないわ。私も何か手伝いたいのだけれど……」

しかし、あれもしなくていい、これもしなくていい、と言われ私はすることが何もなかった。

そして、そんな姿をちらりと横目でみるエリーナの心中は、

（ジュリア様に家事をさせようものなら、さらに負担がふえてしまふ……！）

そう思うと思わず背筋が凍えるエリーナ。

ちらりと主を見ると何かを考え込む仕草をしていた。

（い、いけない！とにかく、ジュリア様には違うことをしてもらって気をそらさなければ……！）

エリーゼは慌ててお茶を入れると、そばにあった本の入ったカバンをひっくり返し、ジュリアが興味を持ちそうな本を取り上げるとお茶と一緒にそれを差し出した。

「ジュ、ジュリア様？ぜひ、これをお読みになってお待ちください」
必死で平常心を保ちながらいつもの笑顔で話しかけた。

「まあ……でも、エリーナが働いているのに私が本を読んでは

なんて・・・」

「いいえ！！これはただの本ではありません！！離縁に関してつづられた本なのです！どうぞ！ジュリア様はジュリア様のなさるべき事をなさってください！私もこれが侍女としての仕事ですから！！」

そう言っつて、私は渡された本に目を落とした。

『コレで離婚問題もバツチリ！』

・・・どうしてこんなものが・・・。

ちらりとエリーナを見たが、エリーナはせつせと荷物をクローゼツトへと運んでいた。

ひとつため息をつき、とりあえずページをめくってみた。

するとどうだろう。

例として挙げられている夫婦のさまざまな不満や問題に私は思わず目を丸くしてしまった。

『夫の浮気癖がひどく別れたいのですが慰謝料は頂けるでしょうか？』

そ、そんな、そんなことで別れるの？だったら、側室を持つクラウス様は間違っているのでは・・・？

いいえ！そんなわけないわ！だって、世継ぎがいなければ世継ぎ争いが起こってしまうじゃない！！

王室内で争うなんてあってはならないことだわ！

思い切り首をふりつつ、このページは参考にならないとさらに先に進んだ。

『夫の暴力がひどく耐えられません。だけど、生活費もすべて夫が持っていて離婚しようにも離婚後生活していけるかどうかが不安です』

暴力はいけないわね……。でも……。生活のお金のことなど私が考えたことなんてないけれど、それが普通なのではないかしら？ドレスや宝石を買うのは別にしても、何をするのだってクラウド様の許可が必要だわ。でも、そうしなければ湯水のようにお金を使う者も出てきてしまうかもしれないし。管理することは当然だわ！

これも、参考にはならないと更にページを進める。

『夫のたびかさなる嘘にたえられなくなりました。これで離婚はできるでしょうか？』

ドキリとした。

クラウド様が嘘をついているわけではないけれど、私がクラウド様に嘘をついているようなものだ。

先を読み進めると、この本の著者であろう人物がその質問に回答していた。

私は、その回答の一部に目が止まった。

『夫婦といえども、所詮赤の他人。隠し事のひとつや二つはあるでしょう。嘘をついた事を責める前に、どうしてそのような嘘をついたのかよく話し合ってみてはいかがでしょうか？それでも、許せないと感じるのであれば離婚も仕方ないのかもしれない。』

……。話し合いなど出来るわけではない。

こんな事がバレてしまつては国がどうなつてしまつか・・・。
それならば、黙つて離縁した方がよっぽどマシだ。

「・・・・・・・・それに・・・・・・・・」

私はきつと嫌われてしまつたろう。

そう思うと、言葉にならない言葉で胸が張り裂けそうだった。

「ジュリア様・・・？」

のめり込むように読んでいたその本から目をあげると、エリーナが
声をかけてきた。

とても心配そうに・・・。

その声色に、ハツとして無理やり笑顔を作つた。

「・・・・・・・・エリーナ。ありがとう。とても参考になつたわ」

そう言つて、その本をエリーナに返した。

エリーナは何か言いたそうな顔をしていたが、そのまま本を受け取
るとそれを戻しに部屋を出て行つた。

「・・・・・・・・このままどこかへ行つてしまつ方がいいのかしらね・・・
」

ぼつりとつぶやいた言葉は、少し考えていたことだった。

この城を抜け出して、姿をくらませる。

だけど、それをしてしまつと多くの人に迷惑がかかつてしまつたろ
う。

そう思うと、実行することは難しかった。

「……やはり側室の方に、お子を身ごもって貰って、その方を正妃にするようにしてもらうしかないわね……」

それには、兎にも角にも側室の方がお子を宿さなければ話にならない。

時間があれば、こちらに来られるとおっしゃっていたが、それを思い留めるようこちらからもお願いしよう。

「こんな事を書かなければいけないなんて……」

側に置いてあった紙とペンをとり、初めてクラウド様宛に手紙を書いた。

こちらへは来られるよりも、王宮に上がられたばかりの側室の姫君を気遣って差し上げてください。きつと心細い思いをされているでしょうから。と……。

書き綴っているうちに、紙にぽたりと雫が落ちた。

「馬鹿ね……。最初から本当の事を話しておけばよかったのよ……。今さら泣くなんて虫がよすぎるわ……」

落ちた涙をシミにならないよう綺麗にふき取ると手紙を封筒に入れた。

そして、エリーナからアルバートへと手紙は渡され、アルバートはその日のうちに手紙をもって城へ向かった。

6 (後書き)

最後、少し手直しをしました・・・。
話の都合上です(< | >)

「ジュリア殿。本日はわざわざご足労いただきありがとうございます」

「いいえ。こちらこそお招き戴きましてありがとうございます」

夕方、再びフィーナ国の王宮へとやってきた私はトレース陛下と向かい合わせに座っていた。

「今日も素敵ですね」

にっこりと笑うお姿は威厳と自信に満ち溢れていた。まさしく国を背負ってたつ男という感じだ。

「ありがとうございます。でも、お忙しいでしょうにわざわざこの様な席を設けて頂いて宜しかったのでしょうか・・・」

クラウド様はいつも夕食もそこに仕事に戻ってしまう。国を支える者としてやらなければいけない事がたくさんあるのだから。

それなのに、他国の私が突然訪問してしまったものだから迷惑をかけているのではないか心配だった。

「ああ。もちろんだよ！私こそこんな素敵な女性と夕食を共にできるなんて私は幸せ者だね」

陛下はお優しい。

「もったいないお言葉ですわ」

ぺこりと頭を下げると、くすりと笑う声が聞こえる。

「そんなことはないさ。君が結婚していなかったら私の妻にしたいくらいだ」

その言葉に顔をあげると思わず息が止まりそうだった。

声色や言葉のトーン、表情はとても穏やかで優しいのに、陛下の目は真剣にこちらを見つめていた。

思わず背中がぞくりとした。

「・・・そ、そんな。トレース陛下の様なお方なら私の様な小娘ではなくとも、綺麗な女性たちが放っておかないでしょう？」

多少声が上がってしまったが、なんとか言葉をつなぐ。

私の言葉に、陛下もいつもの表情に戻った。

「・・・そんな事ないよ？君みたいな可愛いお嫁さんが早く来てほしいものだ。なんて、こんな事を言っていたらクラウドに怒られるかな？」

陛下の冗談にほっと胸をなでおろした。

そして、その言葉にふと思い出した。

「・・・そう言えば陛下とクラウド様は仲がよろしいんですよね？」

「ん？・・・ああ。そうだね。私たちが幼い頃はお互い国を背負う立場としてあちこち勉強に行っていた。その際に、クラウドとも何度か一緒になってね。兄のように私を慕ってくれているよ」

「まあ！そうだったのですか？ふふ、お2人とも小さい頃からさぞかし優秀だったのでしょうかね」

陛下とクラウド様の小さい頃を思い浮かべると思わず頬がゆるんでしまう。

「いや、そんな事ないよ？私もクラウドもよくケンカをしていたよ。討論していたはずなのに、熱くなるとお互い一歩も引かなくてね。ああ、そうそう、あれはいつだったかな？女の子を取り合ってケンカしたこともある」

陛下は幼いころの思い出を楽しそうに語ってくれた。ただ、陛下の言葉に私は思わず胸が痛んだ。

あの温厚なクラウド様がトレース陛下と取り合うくらい心を許した女性がいたなんて・・・。いくら、幼いころの話とはいえ心が痛むのは押さえられなかった。

「・・・その女性とは今でも・・・仲がよろしいのですか・・・？」

思わず口から勝手にこぼれ落ちた言葉に分自身が驚いた。

「ん？その女の子かい？んー・・・それが、私はあまり覚えていないくてね。たぶん、どこかの貴族の娘だったとは思っただけど、それが誰だったかは覚えていないんだ」

陛下がこちらを見て申し訳なさそうにそう言う。

「そうですか・・・」

陛下の視線に気づくこともなく、素直に感情をだして落ち込んでし

まう私に、向かい側から苦笑の様な笑い声が聞こえて、はっと顔をあげた。

「あ！申し訳ありません！！」

「いやいや。そんなに気にしなくても、昔の話だからね。クラウドも忘れてると思うよ」

陛下にフォローされてしまった。情けなさに思わず顔が下を向く。

「さあ、昔話はこれまでにして料理をいただくこう！」

目の前にはフィーナ国特産の食材で作られたメインディッシュが置かれていた。

陛下の心配りににつきりと笑って答え、目の前の料理に手を伸ばした。

心の中では、昔のことだと解っていないながらも、どうしてもか気になってしまつその子を心の隅に追いやつて。

「それで、王妃業を休む為と言っていたが、何か辛い事でもあったかな？」

皿の上の料理がなくなると、次はデザートが運ばれてきた。それと同時に陛下が口を開いた。

「いいえ。辛いことなどありませんわ。クラウド様にも、国の者にも良くして頂いております」

につきりとそう答えた。

他国の王にこんな事を悟られないようにと。

「ふふ。即答だね。まるで答えが用意されていたみたいだ」

陛下の言葉に思わず眉を潜めた。

「……陛下。試されたのですか？」

自分が思っているよりも低い声が出てしまった。

「いやいや。とんでもないよ！そんな怖い顔をしないでくれ。何か悩みがあるなら相談に乗りたかったただだよ。弟の様なクラウスのお嫁さんだ。私にとっては妹みたいなものだからね。まあ、力はあちらが上だけど……」

おどける陛下に私は少し肩の力を抜いた。

「……ありがとうございます。でも……本当に何でもありませんわ！お心づかい感謝致します」

これ以上何も聞いてくれるな。そんな思いを込めて精いっぱい笑顔でそう答えた。

「……まあ、ジュリア殿がそういうならあまり聞かない事でしょう。でも、何かあったらいつでも私のところへ来なさい。力になるよ」

そついうと陛下はデザートに口をつけ、フィーナ国特産の果実で造ったそのデザートの説明を始めた。

（よかった。これ以上聞かれたらなんて答えていいかわからなかったもの……。）

危うく、この想いを陛下に打ち明けるところだった。

でも、それほどまでに私の心はギリギリの所までできている事を知った。

（もう少し大丈夫だと思ったのに……。早めにクラウド様から離れて正解だったかもしれない。）

陛下の言葉はあまり頭に入ってこず、私は時々相槌を打つだけだった。

陛下と夕食を共にしてから、しばらくは平和な日が続いた。

「心安らぐわ……」

こんな天気の良い日は庭でランチにしましょう。

と言う事で、今日はエリーナとともに庭で朝食を取っていた。

周りは緑に囲まれ、庭には季節の花々が咲いている。

遠くでは鳥たちのさえずりが聞こえ、太陽の暖かい日差し。

それらに包まれながら朝食を取るなんて、いつ振りだろう。

「まだ、イングリッシュにいた頃以来かしらね」

我が祖国イングリッシュ国。

とつても緑が多く、天気の良い日にはよくこうやってエリーナとお茶をしていた。

「そうですね。あの頃はまさか他国にジュリア様が嫁ぐとは思って
おりませんでした。……でも、そのおかげで私もこうして未だに
ジュリア様と一緒にいられますけどね！」

にっこりと笑うエリーナをみて、心が温かくなる。

「……そうね。私もまさか他国に嫁ぐなど思っていなかったわ。
いくらお父様が大公爵とはいえ、王族でもない私がこんな大役など
頂ける身分ではないものね」

そう、クラウド様が我が家に求婚に来なかったら、大人しく同じ貴

族の方と結婚していただろう。

他国の王族へ嫁ぐのは王族からと決まっていた。王族から嫁ぐ娘がいない場合は貴族からとなってはいるが、まだ未婚の王家の娘がいるのに、それを差し置いて公爵家の娘が嫁ぐ事など、本当ならありえなかったのだから。

「・・・ああ！ダメね！せっかくこないいお天気なのに暗い事を考えているなんて！」

この結婚は全てが間違っていたのだ。

そんな事を考えているとどんどん気持ち沈んでいく。だから、気分を変えようと空を仰いでみる。

「そうですね！せっかく庭に出てきたんですから、少しお庭を歩かれて見てはいかがですか？」

そんな私にエリーナは答え、私は頷き庭の散歩道へと進んだ。

周りの草花は太陽の光に照らされて生き生きと咲き誇っている。

少し太陽の光が強い感じはするが、陽の光によって私も少し元気がもらえた様な気がする。

。だけど、穏やかな日ってそんなに長くは続かないものなのね・・・

1週間前に、アルバートに託した手紙の返事を持ってアルバートが

城へ戻ってきた。

その知らせを受け、その日から私は再びリアーシャ様の姿へと戻った。

クラウス様に近いアルバートの前では本当の姿をさらす訳にはいかなかった。

「ジュリア様。陛下よりお返事を頂いて参りました」

そう言って差し出した手紙を私は受け取る。

すると、もう一通アルバートは渡しにくそうにそれを差し出した。

「……………それから、こちらは……………招待状になります」

「招待状？」

夏も終わり秋の気配が深まってきた今日この頃。

しかし、まだ夜も寝苦しい日々が続く、舞踏会やパーティなどの季節には少し早い。

首をかしげながら、その招待状の封を切った。

「ご側室歓迎に伴う舞踏会開催のご招待」

それを目にした私は思わずアルバートを見てしまった。

その視線をそらすかのように下を向くアルバートについていつい溜息をついてしまったのは許してほしい。

そして、もう一通の手紙の封を切った。

『親愛なるジュリア』

君からの手紙とても嬉しかった。ただ、内容はあまり嬉しくなかったけれどね。

さて、本題に入る前に君には謝りたい。

この様なものを君に渡さなければいけない事を本当に申し訳ないと思う。

そして本題だが、側室を迎える際には必ず歓迎の意をこめて舞踏会を行うのが我が国の仕来たりだ。

正妃の場合は結婚式を行うが、側室にはそれは行わない。側室だから当然と言えば当然なのだが、代わりに舞踏会にて側室を迎える宴を開くこととなっているのだ。

そして、そこに正妃として君も出席をして欲しい。

ただ・・・、今回のパートナーとして私は君と出席する事が出来ない。

君のパートナーとして、アルバートと共に一緒に出席してくれ。

私の心はいつも君にある事を忘れないで。舞踏会で会えるのを楽しみにしているよ。

愛をこめて

クラウド』

その手紙を読み終えた時、私の心の中で何かが壊れる音がした様な気がした。

そして再び、アルバートを見ると今度はしっかりとこちらを見ていた。

「申し訳ございません。私の様な者がパートナーで……」
頭を下げるアルバートにつこりと笑いかける。

「いいえ。私の方こそ、この様なパーティーが苦手なあなたにパートナーを頼んでしまう事になってごめんなさい。それに、気まずいでしょうに……」

パーティーでの私の立場を考えると、アルバートが可哀そうだった。

「いいえ！！私は何があっても貴方様をお守り致します」

なんだが、噛み合っていない様な答えに思わず苦笑する。

「ありがとう。では、早速用意をしなければいけないわね。アルバート、貴方は疲れているでしょうから、ゆっくり休んで。御苦労さま」

そう言つて、アルバートを下がらせると、エリーナを呼んだ。

「エリーナ。申し訳ないけれど、新しいドレスを仕立てる用意をして頂戴」

ドレスだけではない。新しい靴も、アクセサリも準備をしなければいけない。

そんな事を考えていると、エリーナが傍にきて顔をひきつらせた。

「ジュ、ジュリア様？どうなさったのですか！？」

慌てて私に駆け寄るエリーナに、私は首をかしげる。

「どうしたの？私は別に何ともないわ。さあ、舞踏会の準備をしましょう？」

にっこりとエリーナに笑いかける。

だが、エリーナはどんどん泣きそうな顔になっていった。

「ジュリア様……。一体どうされたのですか！？今のあなたは、王妃の仮面をかぶっておられますわ！！」

王妃の仮面？

そんなものをかぶっているつもりはない。

「そんなに、お心を乱したお手紙はなんと書いてあったのですか？」
おろおろするエリーナに、クラウド様からの手紙と招待状を見せた。
その手紙を見るなりエリーナの手がどんどん震えてきた。

「な……。なん、なんなんですか！！これは！！」

怒っているのに目からは涙があふれ出しているエリーナ。

「クラウド様は、一体何をお考えなんですか！！ジュリア様の事を想うのでしたら、欠席させるべきでしょう！！」

手紙に向かって文句を言っているエリーナに苦笑しつつ、私はその手紙をエリーナの手から抜き取った。

「エリーナ。これは、この国の仕来たりだそうよ？それでしたら、

私が出ないなどあつてはならない事でしょう？？さあ、涙を拭いて。舞踏会に出席する為の準備をしましょう？？」

「ジュリア様！そんな仮面をかぶっていないとご自身を保てないくらいなのに、どうして、ここまでされるのですか！！」

エリーナの言葉に溜息を吐き私は言った。

「私は、まだこの国の王妃ですもの」

舞踏会はちょうど私たちが休養を終える予定の3週間後。もう、何も考えたくなかった。

8 (後書き)

話の都合上、少し手直しをしました。

招待状を受け取って以来、舞踏会の準備に追われていた。新しく作るドレスの採寸。デザインの打ち合わせ。

装飾類の選別。ダンスの練習。

気づけば、あと3日でここを去らなければいけない。

その間、傍ではずっと心配そうにしているエリーナに思わず苦笑する。

「エリーナ？私は大丈夫よ？貴方の方が今にも倒れそうで心配だわ。私の事はいいからゆっくり休みなさい」

「いいえ！私はジュリア様のお傍を離れられません！」

このやり取りもはや何度目だろうか？

何度休めと言っても、私の事が心配だといって傍を離れようとしな

い。

溜息をつきつつ、そんなに思ってくれる事に少し心が満たされる。しかし、何かをしていないと考えるとなくともクラウス様と側室の姫が寄り添っている姿が頭に浮かんで来ては今にも取り乱してしま

いそうになる。

こんな事で本当に舞踏会に参加できるのだろうか・・・。

再び深いため息をついた時、扉からノックの音が聞こえた。

「失礼します」

対応にでたエリーナの向こう側からアルバートの声が聞こえた。

ダンスの練習はもう終わったはずだったが、何の用だろうか？

「失礼します。ジュリア様。至急お伝えしたい要件がございます」

私の所に持ってくる至急の要件？

その言葉になんとか嫌な予感がしたが、アルバートに先を続けるよう促す。

「はい。・・・実は、エルステリア国の国境近くで以前より問題となっておりましたダルトン団との争いが大きくなり私の指揮致します第2騎士団もそちらへ赴くようにと国王より仰せつかりました」

「・・・それで、舞踏会のパートナーとして参加できないと言う事ですね？」

アルバートの言いたい事はそれだったのだろう。
先を見越して私の方からそう告げた。

「・・・申し訳ありません」

何一つ言い訳も言わず頭を下げる。

いや、国王からの仰せであるのならばそれが最重要事項だ。

謝る必要すらないのに、本当に申し訳なさそうに頭を下げるアルバートに顔を上げさせた。

「アルバート？顔を上げて下さい。私は構いません。それよりもしつかりと国を守って下さい。それが、あなたの仕事ですから。ただし、ご自分の命もくれぐれも大事にして下さいね」

国王命令だというのなら仕方がない。

何より民の為に争い事は早く治めて欲しい。

そう思いアルバートに気にしなくてもいいと告げたつもりだった。それなのに、そう言った途端アルバートの表情は強ばる。

「……っ！！本当に、申し訳ございません！！」

先程よりも深く頭を下げ、部屋を後にするアルバート。

そんなに、気にしなくてもいいのに……。と思いながら、締められた扉に目をやった。

「だけど……。パートナーなしで舞踏会に赴くのはやはりまずいわよね……。」「

決してこちらに意図はなくとも一人で出席するとなると、周りにどう思われてしまうかわからない。

側室を認めて居ないので思われるかもしれない。

それか、興味もないなどと思われてしまうかもしれない。

どちらにしても、クラウス様にとっていい方には転ばないだろう。

「困ったわね……。」「

アルバート以外にパートナーとして連れて行こうとするとまた色々と考えなければいけない。

正妃として連れていてもおかしくない方。

何かしらの関係を疑われる事のない方。

ふと、思い浮かんだ人物がいた。

……エルステリア国にとって大事な方。

「いえ……。ダメよ。お忙しい方だもの……。」「

頭の中からその方を消そうと首を振った時、ノックの音と同時にエ

リーナの声が聞こえた。

「ジュリア様。エリーナでございます。フィーナ国より使者が来られています」

今まさに頭から消そうとしていた人物の国の名を聞いて再び色濃くその方が思い浮かんだ。

「入室を許可します。はいりなさい」

そういうと、エリーナと共に、フィーナ国の騎士服を纏った男が部屋へと姿を現した。

「フィーナ国国王様よりジュリア様に事付けを預かって参りました」
頭を下げる騎士に先を促した。

「今度開かれますエルステリア国での舞踏会につきまして、ジュリア様のパートナーがお決まりでないようでしたら、ぜひ我が国王と一緒に参加して頂けませんでしょうか？」

あまりのタイミングのよさに思わず目を丸くしてしまった。

「え．．．ええ。御迷惑でないのですたら、こちらからもお願い申し上げますが．．．．．」

いきなりの事で戸惑いを隠せない。

トレース陛下であればエルステリア国の王妃としてパートナーを務めても問題ない。友好国の国王と出席する事はむしろクラウス様にとってもプラスに繋がるだろう。

だけど、あまりのタイミングの良さに何か引つ掛かるものはあった。しかし、パートナーのいない今はとてもありがたい申し出に首を縦に振るしかなかった。

「つきましては、色よいお返事が頂けた場合にこちらをお渡しするようにと預かって参りました」

騎士から渡された箱の中には、大きな赤い石を真ん中に周りには小さいながらもキラキラと光るダイヤがちりばめられているネックレスが入っていた。

「こ、こんな、高価な物は頂けません!!」

この大きな赤い石は『レッドベリル』ではないだろうか？またの名をレッドエメラルド。すごく希少価値の高いものだ。

慌てて騎士に返すが、騎士も困った顔をしてそれを受け取らない。

「受け取って頂けなければ、その場に捨ててこいと申し遣っております。私としても受け取って頂きたいのですが、受け取って頂く訳にはいかないでしょうか？」

弱ったようにそう言われてしまっでは受け取らなければいけない様に思えてくる。

「……わかりました。……トレース陛下に感謝の意をお伝え下さい。後日改めてお礼に伺わせていただきます」

本意ではないが、あまりの騎士の困り様に可哀そうになった。それを聞いた騎士は、正反対にぱあっと明るい顔をした。

「いえ！そうおっしゃるだろうとの事でしたので、お礼はそれを身に付けて一緒に参加してください。とのことでした！！」

明るくそう言い放った彼はスキップをしそうな勢いで部屋を後にした。

最後は、しっかりと舞踏会前にお迎えに上がりますと言い残して・・・。

騎士を見送って戻ってきたエリーナは、ジュリアの手の中にあるそれを見て深いため息をついた。

「はぁ・・・。さすが、トレース国王様ですね。あのような若い騎士にこれを持ってこさせ、受け取らなければ捨てるだなんて、ジュリア様のお心の優しさを見越していらっしやっただんですね」

呆れたようにそっぴうエリーナ。

「やはり・・・舞踏会で着けなければダメよね・・・」

そう言われたのだからそうなのだろうが・・・。

「そうですね。幸いドレスのデザインにも不釣り合いではありませんし、着けて行かれた方が宜しいと思いますよ」

2人して深いため息が出た。

クラウド様からの贈り物以外を身に付けて舞踏会へと参加しなければいけないなんて。

手の中にはキラキラとその存在を現すかのように光っているそれを見つめて、思わずため息が溢れた。

3日後。

1か月前と同じように少ない荷物を馬車に乗せ、リアーシャ様の格好をした私が馬車に乗り込んだ。

本当の姿でいられる時間は終わってしまったのだ。

その上、国に戻ったらクラウス様の側室の方と嫌でも会わなければいけない。

「さあ、出発しましょう」

あれ以来、私の顔はつねに微笑を保っている。

鏡を見ても完璧だと自分で思う。

王妃としての役目はしっかりと果たせるだろう。

馬車に揺られながら、窓に映る自分の姿をみて溜息がこぼれる。

「……溜息ばかりですね」

ぽつりとつぶやくエリーナの声は私には届く事無く、2週間馬車に揺られ続けた。

エルステリア国に到着すると、町の雰囲気は変わらず活気づいていた。

「……戻ってきたのね」

窓の外を流れる景色はこの1年で何度もみた景色に変わって来ていた。

「はい。まもなく城に到着しますよ」

向かい側でにつこりと笑うエリーナに私も頬笑み返す。

城の近くまで来ると、本日舞踏会に招待されている客であろう馬車がひしめき合っていた。

「これでは目立ってしまいますので、裏門から入っても宜しいでしょうか？」

エリーナの問いに私は頷き、彼女は馬車の外へと声をかける。

他の馬車を見送り、裏門の方へ回るとそこでは侍女や従者たちがあわただしく今日の準備をしているようだった。

そんな中、その場に相応しくない馬車の到着に彼らは動かしていた手を止めた。

「……到着いたしました。足元にお気を付け下さい」

その言葉の後、馬車から下りて現われた私に、彼ら達は驚きの表情を見せながらも頭を下げる。

そんな姿を見て、慌てて口を開いた。

「皆さん。私の事は気にせず、仕事に戻って頂戴。突然邪魔をしましてしまってごめんなさい」

彼らにとっては、王族に会えば当然の事をしたただけなのだが、思い

もよらず王妃からそんな言葉を貰った事に皆驚き、固まってしまっていた事に私は気付かなかった。

いつもならば、威厳を保つために当然の様に通りすぎていた事をすっかり忘れていた。

しかし、それに気付いたエリーナが慌てて声をかけた。

「さ、さあ、ジュリア様。お部屋に戻って、舞踏会の準備を急いで行わなくては間に合わなくなります」

そういつとその場を後にし、エリーナに連れられ自室へと向かった。部屋に向かう途中、クラウド様に挨拶をしなくてはと思ったが彼も準備で忙しいでしょうからと侍女に止められ、そのまま真っすぐ部屋へと戻った。

1 か月ぶりの自室は塵も埃も見当たらない。

主が留守にしていたなど嘘のようにいつもの景色が広がっていた。

「さあ、ジュリア様あちらで頼んでいたドレスが届いています。こちらに着替えましょう」

溜息をつく暇もなく部屋に着くなりエリーナと他の侍女たちにドレスを脱がされ、着替えさせられる。

コルセットをギュツと締められ、ネイビーのドレスに身を包んだ。あちらで頼んでいたベアトップのロングドレス。胸元にはクリスタルがちりばめられ、腰の部分がキュツとしていて大きなりボンが付いていた。そこから徐々に広がっていくドレスはとても上品に見える。そして、胸元にはトレース陛下から贈られたネックレスが着けられる。

ネイビーのドレスに深い赤の宝石はまさにぴったりだった。

「……まるで合わせて作られたみたいね……」

思わず苦笑してしまう。
着替えが終われば、鏡の前に座らされメイク、髪の設定と徐々に作り上げられていく。

「出来ました」

後ろから声がかかり、目を開けると鏡の中にいたのは大人の雰囲気
を纏ったリアーシャ様にそっくりな自分が王妃の仮面をかぶってそ
こに座っていた。

「……ありがとう。素敵だわ」

にっこりほほ笑むと、鏡の中の自分は優雅にほほ笑む。

「……ほう……。素敵ですわ。ジュリア様」

鏡越しにうつとりと私を見ているエリーナに思わず苦笑した。
以前に戻った感じがしたからだ。

「また、リアーシャ様のお姿だもの。あの方の様にはいけないけど
ね……」

心の美しさが違う。
そう思った。

その言葉にエリーナが何か言おうとしていたが、扉からのノックの
音にエリーナの言葉が発せられる事はなかった。

「……ジュリア様。トレース陛下の使いの者が参りました」

ノックの音は迎えが来た事を告げていたらしい。
思わず息をのみ、鏡を覗き込んだ。

（貴方は王妃。クラウド様に相応しくある様に努めなさい。大丈夫。
上手くやれるわ）

心の中でそう自分に言い聞かせると目を瞑り深呼吸をした。

「・・・ジュリア様」

再び呼ぶエリーナの声に目を開けその場を立ちあがると、扉の前で
待つ騎士とエリーナとともにトレース殿下の待つ控室へと向かった。

「ジュリア殿！！」

舞踏会の行われる広間前のトレース陛下の控室にて陛下と謁見する。

「お久しぶりでございます。トレース陛下。先日は大変お世話にな
りました」

扉を開けその部屋へ入ると腰を落とし挨拶をする。

「それから、このような素敵なネックレスを頂きありがとうございます
ます。お礼が遅くなってしまい申し訳ありません」

胸元にきらりと光るその礼を言うと、頭の上からくすりと笑う声
が聞こえる。

「いいや、着けてきてくれて嬉しいよ。とても似合っている。ここ
らこそ、急にパートナーを頼んでしまって申し訳なかったね。パー

トナーを探していたときにクラウドから君と参加しない事を聞いて、それならと思つて誘つてしまつたんだが、迷惑じゃなかつただろうか？」

胸がズキリと痛むが、表情には出さない。

「とんでもございません！誘つていただけで光栄ですわ」

にっこりと笑つてそう答える。

「そうか。それなら良かったよ。それにしても……また、雰囲気が違うようだ……？」

首をかしげる陛下。

「ええ。実は……その事で陛下に謝らなければいけない事がございます」

しっかりと陛下の目を見ると陛下は頷いた。

「ふむ。何かな？」

「はい、先日は休暇を頂いていた事もあつて少し気が抜けておりました。いつもより身だしなみに手を抜いておりましたので陛下には大変失礼な姿をお見せいたしました。……申し訳ありません。どうか、先日の姿は忘れて頂けませんでしょうか？」

トレース陛下は顎に手をあて、少し考えていた。

「……つまり、先日の姿は休暇中の姿で人前で見せる姿ではなか

「ったと？」

少し低くなった声に、あつてはならない失態だったと頭を下げる。

「本当に申し訳ありません。陛下にお会いするのにあのような姿で会うなど許される事ではございません」

あの姿はみつともなく人前で見せる姿ではなかったと告げる。

そう言えば他の人にむやみに話したりはしないだろう。彼は女性に恥をかかせるような人ではないはずだ。

そして、クラウス様の耳に入らない様に……。

「どうか、先日の失態はクラウス様に内密にして頂けないでしょうか？立場を考えずとった行動の罰は私が受けます」

それを聞いたトレース陛下はにっこりと笑った。

「ふむ……。クラウスには知られたくないのだね。わかったよ。先日の事は内密にしておこう。私としては別に失態などと思っていないが、君と秘密を持つ事は楽しそうだ。それに罰などはないよ。友人として訪ねてくれたのだ。どんな姿でも歓迎するよ」

トレース陛下の暖かい言葉に私はほっと胸をなでおろした。

「……ありがとうございます！」

これで、私の姿を伝えるものはいない。

安心した私は思わず頬が緩んだ。

「……そんなに……かな……」

トレース陛下は何かをぼつりとつぶやいた。
だが、私には何を言ったか聞き取れなかった。

「え？陛下、何かおっしゃいましたか？」

首をかしげトレース陛下を見るが、にっこりと笑うと、なんでもないよと首を振られてしまった。

「さあ、ジュリア殿。そろそろ時間だよ。舞踏会へと参りましょう」
そう言うとトレース陛下は左手を差し出し、私はその手に自分の手を重ねた。

心を閉じ王妃の仮面を張り付けて、トレース陛下と共に舞踏会へと足をすすめる。

控室を出ると、再び別の個室へと案内される。

「では、私がお2人のお名前を読み上げましたら、こちらより広間へと降りて下さい」

エルステリア国宰相ダグラス・ルーベンスから舞踏会の説明を受ける。

舞踏会では王族が名前を呼ばれた順に、2階の王族席より階段を下り広間の王座へと登場する。

今回は主役がクラウス様と側室の姫君になる為、彼らが一番最後だった。

その前が前国王夫妻。つまり、クラウス様のお父様とお母様だ。

そして、その前に降り立つのが私とトレース陛下となる。

「……ジュリア殿？」

ふと聞こえるトレース陛下の声に自分が考え込んでいたのだと気づかされる。

「……はい？」

周りを見て見ると先程まで説明をしていたダグラスの姿は見えず、私の前にトレース陛下が見下ろす様に立っていた。

座っている私と目が合うとトレース陛下は仕方ないと言いたそうな顔をしてふっと笑った。

「……ダグラス君の説明を聞いていたかな？」

その問いに私は頷く。

「はい。私達は王弟君の後に広間に降りればよいのですよね」

そう言つてトレース陛下を見上げると陛下はこくりと頷く。

「……その後は？」

そう問われると首をかしげるしかなかった。

その後はと言われても、後は前国王夫妻とクラウド様達が降りてくるのを待つしかない。

「……ダグラス君は君に心を乱さない様にと言っていたのは聞いてなかった？」

優しくそう聞かれ、私は首を振った。

「……申し訳ありません。聞いておりませんでした……」

ダグラスが言った言葉の意味よりも、自分がぼーっとしていた事に申し訳なく思い頭を下げた。

ダグラスの言うその言葉に深い意味があつたとは知らずに。

「いいや。構わないよ。……自分の夫と側室の舞踏会だ。心を痛めるなど言う方が無理だったね。辛いようだったら、いつでもいいなさい。早めに引き上げよう」

トレース陛下はそう言つと幼子にする様に頭に手を置く。

その行動に目を丸くしながらも陛下の心遣いに心が温かくなった。

「……まあ！トレース陛下！私は子供じゃありませんよ？」

少し睨むようにトレース陛下を見上げると、彼は肩をすくめごめんごめんと謝った。

そして、再び左手を差し出した。

「さあ、行こうか」

その言葉とほぼ同時に、宰相の声が聞こえた。

「……フィーナ国王トレース・フィナル様。エルステリア国王妃ジュリア・エルステラ様」

トレース陛下の左手を取った。

「……宜しくお願い致します」

一言告げるとトレース陛下は頷き、私達は階段上に姿を見せた。広間に見える人々は我が国の貴族を始め近隣諸国より招待された人々で埋め尽くされていた。

人の多さに圧倒されそうになりながらも、横で手を振るトレース陛下に続き私も優雅に手を振った。

すると、隣りから小声でトレース陛下の声が聞こえた。

「さあ、下に降りるよ」

トレース陛下のリードによってゆっくりと階段を降りると、先に席についている人たちに挨拶をしながら私たちも自分たちの席に着いた。

それを見計らった様に、前国王夫妻の名前が呼ばれた。

「……大丈夫かい？」

広間の人々が前国王夫妻の登場に目をやる中、トレース陛下は相変わらず私を気遣って声をかけてくれていた。

「はい、お気遣い頂いてありがとうございます」

にっこりと笑って答えるとトレース陛下もにっこり笑って頷く。ふと視線を前に向けると、すぐそこに前国王夫妻の姿が見えていた。先に席に着かれていた方々に挨拶をしながら、どんどん近づいてくる前国王夫妻は、数えるくらいしかお会いした事はなかったが、人柄がよく、いつも良くして下さっていた優しい義父と義母だった。そんな、彼らがすぐ近くまで来ると私はにっこりと笑って挨拶をした。

「お義父様、お義母様、ご無沙汰しております」

「うむ、ジュリア。元気そうで何よりだ。……此度の事申し訳なく思う」

義父の言葉に胸が痛む。

「……いいえ。国の為には必要な事と思っております」

「そうか。しかし、お前たちもまだ若い。焦らずやりなさい」

義父の言葉ににっこりとほほえみ返事をする、彼らも自分たちの席へ向かった。

ふうと誰にも気づかれぬように小さな溜息をついて、前国王夫妻をちらりと見ると義父が義母を気遣いながら椅子に腰をおろしていた。前国王夫妻の間にはクラウス様と弟君のシルヴィ様2人の王子がいた為、側室はいなかった。

その為か2人の代には争いごともし起きず、クラウス様が成人を迎えると、前国王は早々に国王の席をクラウス様に譲り義母と2人で余生を楽しんでいた。

嫁いだばかりの頃はそんなお2人の様になりたいと心から思っていた。

「……エルステリア国国王クラウス・エルステラ様！」

宰相が呼んだ愛する夫の名前に私は我に帰ってそちらを見上げた。

階段上には、にっこりと優しい表情で手を振る夫の姿が見え、ひさしぶりに見るクラウス様の姿に心がときめいた。

しかし、その次の瞬間私は息が止まりそうになるくらい驚いた。

クラウス様の横に並ぶ女性の姿。

その女性は慣れた様に広間にいる人々に手を振って微笑んでいた。

「……ジュリア殿？」

私の様子に気づいたのか、隣りからトレース陛下が声をかけてくれているが、私はそれに答える事が出来なかった。

私の目はその女性に釘づけになり、無意識のうちに両手を胸の前で組み力が入るあまり震えていた。

「……ジュリア殿？どうされましたか？」

隣りではしきりに声をかけてくるトレース陛下も全く私の視界には入っていないかった。

「……………ど、どうして……………」

私の言葉が聞こえたのか、トレース陛下が私の肩に手を置こうとしたその時、宰相の声が広間に響き渡った。

「この度、新しくご側室として迎えられましたイン格蘭ンシャ国王女リアーシャ・イングヴァル様！」

その瞬間、階段上に居るリアーシャ様と目があつた気がした。

だけど、今の私の目には何も映っていなかった。

彼の心を奪った本人が現れた。私の存在意義はこの瞬間なくなってしまうのだ。

「……ユリア様！ジュリア様！！」

エリーナが呼ぶ声には私はハツとした。

「……えっ……？なに？」

ふと周りを見渡せばいつの間にか自室に戻っている。

さっきまで舞踏会の会場となった広間にいたはずなのに、いつの間
に自室に戻って来ていたのだろうか？そう思いながらきよるきよるし
ていると、私の事を心配そうに見つめるエリーナの姿があった。

「……大丈夫ですか？ジュリア様」

「……私、いつの間に戻ってきたのかしら……？」

噛み合わない会話にエリーナの顔が歪んだ様な気がしたが、すぐに
エリーナは答えをくれた。

「……半刻程前に……。トレース国王様がここまで送って下さ
いました」

「……そう。トレース陛下に……」

陛下には申し訳ない事をしてしまった。

あまりの出来事にまったく何があったか覚えていない。

「エリーナ。トレース陛下は何かおっしゃてた？」

粗相があつてはいけないとエリーナに聞いてみるがエリーナは首を横に振った。

「……いいえ。お疲れの様だから早く休ませてやってくれとおっしゃって戻られました。他には特に何も……」

エリーナの言葉に手を顎に当てて考え込んだ。
もしかしたら、何か気付かれたかもしれない。

「ジュリア様……。舞踏会の方で何かあつたのですか？」

考え込む私の顔を心配そうにエリーナは覗きこんでいた。

「……リアーシャ様がいらっしゃったわ」

顔をあげるとエリーナにそう告げた。

「リアーシャ様ですか？この舞踏会にご招待されていらっしゃったのですか？……伺っておりますでしたわ」

首をかしげるエリーナに私は首を振る。

「……リアーシャ様が側室としておいでになったのよ……」

「そうですか。ご側室に……え！？」

思ってもみない私の言葉にエリーナは目を見開いた。

「え！？」、「ご側室に！！？」、「い、一体どういふことですか！？」、「リ

アーシャ様が!？」

軽くパニックに陥っている彼女に私は更に言葉を重ねた。

「……………私は王妃の座を譲らなければね……………」

その言葉にエリーナは動きを止めた。

そうかと思うとまるで錆びついた扉の様にギギギッと音がしそうな雰囲気はこちらに向き直る。

「王妃の座を……………? ジュリア様。一体どういうことなんでしょうか?」

訳がわからないと言った状態でエリーナは私にそう問いかけた。

「あなたも知つての通り、私はリアーシャ様と間違えられてこちらに来たのよ。本物のリアーシャ様が現れた今、私は必要がないもの……………」

苦笑気味にそう言うと、エリーナの顔がみるみる青ざめていく。

「まさか……………そんなはずありませんわ!! クラウス様はジュリア様の事を愛しておいでですわ! この1年側におられたのはジュリア様ではありませんか!！」

エリーナの目には涙が浮かんでいた。

「……………それでも、クラウス様が恋した人はリアーシャ様ですもの。彼が幸せになるのには私ではだめなのよ。ちょうど良かったじゃない。私はもう彼の側にはいる事に限界を感じていたのよ。彼が幸せ

になるのなら喜んで王妃の座を差し出すわ……」

彼女が現れた時には確かにショックを受けた。

クラウス様の側に寄り添っていたリアーシャ様があまりにも自然で私が居たところは始めからなかったのではないかと思うくらいに。

そんな私の言葉にエリーナは口をパクパクさせていたが、何かを思いついたのかハツとした顔をして声をあげた。

「し、しかし！！り、リアーシャ様はご婚約されていたのでは!？」

エリーナの言葉に今度は私がハツとさせられる番だった。

確かにそうだ。

まだ、私がここに嫁ぐ前には他国の王子と恋に落ち2人は結婚するはずだった。

それが今になってなぜ、この国に側室として来たのだろう。

それはなぜ私の元へ知らせがなかったのだろう。

エリーナの言葉に、やっと私はその事に思い当たった。

「……確かにそうだわ……」

彼が幸せになるのならば……その場をリアーシャ様に譲れる。

彼といたらリアーシャ様が幸せになれることも、私は側に居た1年で確信できる。

だけど、もしそうでないのなら……？

「リアーシャ様はどうしてここに来られたのかしら……」

私の言葉にエリーナは頷く。

「本当にそうですわ……。リアーシャ様にはウィルト殿下がいら

「っしゃったはずでは」

「ウィルト殿下……？」

「エリーナ……。あなた、リアーシャ様の婚約者を知っているの？」

私の言葉にエリーナは目を丸くした。

「え！？ジュリア様ご存じなかったんですか!？」

エリーナの勢いに思わず後ずさってしまふ。

「えっ……。ええ……」

「てっきり皆知らないものだと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。」

「……。公爵のご令嬢ともあるうお方がご存じないとは。まさか、ここまで、世間知らずだったとは……。はぁ……」

額に手を当て首を振る仕草は懐かしい。

結婚前、家に居た時にはよくされていた。

「……。だって、誰も話してくれなかったんですもの……」

頭を垂れる私の姿に、エリーナは溜息をつきながらリアーシャ様の婚約者の事を詳しく教えてくれた。

「……。つまり、元々仲があまり良くなかった国の王子と恋に落ち

て反対されていたのに、リアーシヤ様とそのウィルト殿下がその場を収め2人の結婚により友好を深める事となったのね？」

確認するように私はエリーナに訪ねた。

「はい。その様に伺っておりますわ。ジュリア様が嫁ぐ少し前には婚約をしておられます」

「ええ。婚約をした事は私も、リアーシヤ様から直接伺ったわ。でも、まさかそんな出会いだったなんて・・・」

私がリアーシヤ様に聞いていたのは、旦那さまとなられる方がいかに素敵かというのろけばかりだった。

「そこまで想い合って婚約されたのに、どうしてここに・・・」

再び2人の姿が思い浮かんでくると、胸が締め付けられるようだった。

その夜、一人ベットで考え込んでいた。

今日はきつとリアーシャ様の所へ行くのだろう。

そう思うと、自然と涙があふれ出てくる。

散々我慢していたんだ。

一人になって泣ける場所は今この時しかなかった。

「……つく……ひつく……」

やっと自分から離れる決心をしたと言うのに、どうしてもリアーシャ様が現れるんだろう。

クラウス様は本物のリアーシャ様を見てきつと気付いたに違いない。

あの時恋に落ちたのがリアーシャ様だと言う事に。

そう考えると、今日見た2人の姿が頭から離れない。

「……ひつく……どう……して……つく……」

あきらめると何度自分に言い聞かせても涙があふれ出して止まらな
い。

どのくらいの間、そうして泣いていたんだろう。

「……ジュリア」

ベットに潜り込んで泣いていた私の横にギシリと音を立ててベット
が沈み、聞きなれた声が聞こえた。

その声に私は驚いて固まった。

「……ジュリア。そのままでもいいから聞いてくれるか？」

声を抑える為、頭まで潜り込んでいたシーツをそつとなでる彼の手がシーツを通して私の体に伝わってくる。

私は声を出す事も出来ずそのまま固まっていた。

「……君はとても驚いただろうね？君の祖国の人間を側室にしてしまつて……」

クラウド様は私を撫でながら話し始めた。

「だけど、私も驚いた。君にそっくりな彼女が目の前に現れた時……。大臣達が私が君に夢中な事を知つてそっくりな彼女を見つけたららしい」

クラウド様の言葉にシーツを握り締める手に力が入る。

そっくりなのは当たり前だ。だって、それは私がリアーシャ様の真似をしていたのだから。

「……だけど、彼女と君は違う。そうだろう？ジュリア」

私を撫でていたぬくもりがふっと消えて沈みこんでいたベットが軽くなる。

私は慌ててシーツから飛び出すと、目の前には怒りに震えるクラウド様の姿があつた。

「私を騙していたな！！お前みたいな女は二度と顔も見たくない！さつさとここから出ていけ！！」

私を睨みつけるクラウド様の姿に私は思わずその場から逃げだしたくなつた。

「……ジュリア様!!」

エリーナの声に目を開けると、窓からは光が差し込み外では鳥の聲が聞こえていた。

「……夢……?」

未だ覚醒しきっていない私にエリーナが水を差しだしてきた。

「大丈夫ですか?ともうなされておいででしたが……」

差し出された水を受け取り一口口をつけると、私は思っていたよりも喉が渴いていたらしくコップ1杯の水を全て飲み干した。

「……とても……怖い夢を見たわ……」

まるで、現実にあつた様に……。

再び沈む気持ちにエリーナは明るい声をかけてくれる。

「では、気分転換にお庭に出られてみてはいかがでしょう?今日はとてもいい天気ですよ?」

エリーナの言葉にふと窓の外に目をやると、綺麗な青空が広がっていた。

「……………そうね」

窓の外に目をやったまま私は頷いた。

こんな綺麗な青空が広がっている外を見ていても、気持ちは晴れなかった。

それでも、頷いた私を見てエリーナは私をベットから下ろし鏡の前に座らせる。

「……………エリーナ……………」

鏡の中の自分に目をやったまま私は告げる。

「……………今日はリアーシャ様のメイクはしないで……………」

私の言葉にエリーナは驚く事もなく返事をした。

夢の影響だろうか。これ以上クラウド様を騙す事が出来なかった。

あんな風にクラウド様に言われてしまうのなら、いつそ本当の姿を見せて嫌われたかった。

それとも、もう私には興味も持つてもらえないだろうか……………。

知らず知らずのうちに俯いてしまう頭にエリーナから声がかかるまで気づかなかった。

「ジュリア様。お顔を上げて下さい。お化粧が出来ませんわ!」

ハッと顔を上げるとそこにいた私は、フィーナ国の時と同じ本来の姿をした私だった。

「……ジュリア様？どんな夢を見られたのかわかりませんが、その夢の通りになるとは限らないのですよ？今は貴方がするべき事をなさってください」

鏡越しにそう話しかけるエリーナの言葉の意味がわからなかった。

「私は何があったてジュリア様のおそばにおりますから」

そう言うてにつこり笑ったエリーナの笑顔に少し心が軽くなった気がした。

「……ありがとう、エリーナ」

「いいえ。さて、出来ましたわ。次はドレスですね！んー、今日はお天気もいいですしオレンジのあのドレスに致しましょう！」

そう言うとエリーナはクローゼットへと入っていった。

「……私がするべき事……」

エリーナの言葉に私は考える。

今私がしなければいけない事って何？

王妃の座をリアーシャ様に譲る事？

クラウド様に本来の姿を見てもらう事？

ううん……。どれもなんだか違う気がするわ……。

「……リアーシャ様……」

そう、彼女がなぜここに来たのか。

彼女の為にここに来たのにどうして彼女がここにいるのかまずは知らなければ。

もし、何か企んできたのだとしたら……。

この国の王妃としてそれは見逃せない。

最後になるかもしれないこの事は私がやらなければいけない事。

「エリーナ。ドレスはオレンジではなく赤にして頂戴」

するべき事が見えた今、彼女に対抗する為には弱気に見えない様少しでも強く見せたかった。

エリーナの持つてきた赤いドレスを身にまとうとなんだか気持ちがい引き締まった様な気がする。

「ジュリア様？どうされるのですか？」

いきなり赤いドレスを持ってこいと言った私にエリーナは心配そうに私に問いかける。

「エリーナ。私決めたわ。王妃として最後にリアーシャ様がこの国の王妃としてふさわしいか私の目で確かめるわ！」

クラウド様の幸せのためにはリアーシャ様が必要かもしれない。だけど、もし何か企んでこの国を落とすめようとしているのなら私が守らなければ……。

最後にクラウド様の為にして差し上げられる事はそれくらいだわ。

「……ジュリア様」

エリーナは私の言葉に顔をしかめたかと思うと何かを考えるしぐさをした。

そうかと思えば一人納得したかのように顔を上げにつこりと笑った。

「そうと決まれば、参りましょう」

エリーナの言葉に頷けば私たちは部屋を後にした。

向かう先はもちろん庭などではなくあの方の部屋。

緩みそうになる決意を何とか引き締めながら、目的の場所までくれ

ばアポを取っていなかった事を思い出す。ただ、ここまで来て引き返す事も出来ない。突然の訪問に申し訳ない気持ちがあつたが、扉を叩くようエリーナに促した。扉をたたけば中から侍女が顔を出した。

「・・・まあ。これはこれは王妃様。・・・王妃様自ら何の御用でしよう」

さほど驚いた様子はなく、何度か見覚えのある顔にっこりと笑顔を返す。

「突然押しかけてしまい申し訳ありません。リアーシャ様にお会いしたいのですが、リアーシャ様はいらっしゃいますか？」

その言葉にすると侍女は眉をピクリと動かし笑顔を作る。

「・・・本当に突然でいらっしゃる事。わが主に確認して参りますので申し訳ありませんが少々お待ち下さい」

そう言つて扉の奥へ消えていった侍女の言葉はいちいち棘があつた。昔はそんな人ではなかつたはずなのだが、やはりリアーシャ様よりも立場が上と言う事が気に入らないのだろうか？

「・・・ほんつとにあのばばあ・・・」

静寂の中ぼつりと聞こえた言葉にそちらを振り向けばすごい形相のエリーナが立っていた。

「エリーナ・・・言葉を控えなさい」

苦笑しながらエリーナを窘めれば、目を見開き頭を下げる。

「も、申し訳ございません。聞こえていましたか……？」

そろりと頭を上げるエリーナに頷けば、再び頭を下げた。

「すみません。つい思っている事が口に出てしまいました」

「まあ」

反省しているのかいないのか、そんなエリーナに苦笑していたら、再び扉が開いた。

「……どうぞ、お入りください」

向き直って侍女と対面すれば侍女はそう言って扉を全開に開いた。

「……ありがとう」

侍女は何も言わず頭を下げた。

その姿にエリーナの顔が歪むもののそれを抑えさせ、中へと足を踏み入れた。

応接室となっているその部屋は私の使っている部屋より少し狭い。狭いと言えども天井は高く、人が十数人入っても苦しいと思う事無い広さだ。

「……お久しぶりでございます。王妃様」

ふと、視線を前に戻せば椅子の横に立ちあがってドレスを摘み頭を

下げるリアーシャ様の姿があった。

「頭をお上げ下さい。こちらこそ、ご無沙汰いたしております。突然の訪問に應對して頂きありがとうございます」

そういうと、私は裾を掴み腰を落とすに留めた。

一応でもなんでも、この国の王妃は現在私である。

そう簡単に頭を下げるわけにはいかなかった。

だが、リアーシャ様の侍女はそんな私の姿に眉をよせていたのが視界に入った。

「いいえ、王妃様の訪問嬉しく思います。本来ならば、こちらからご挨拶へと伺わなければいけないのに足を運んで頂き申し訳ありません」

にっこりと笑ってそう言うリアーシャ様の姿は立場は違えど、イングランシャ国にいた頃によく見た笑顔だった。

「・・・いいえ」

その笑顔に私が思っている事は間違っているのではないかと心が揺らぐ。

「立ち話もなんですから、どうぞ、お座りになって下さい」

そう言ってリアーシャ様の前の席を勧められれば、礼を言って席に着く。

「お元気そうだなによりですわ」

お互い席に着けば、変わらない笑顔のままリアーシャ様がそう話しかけてくる。

「リアーシャ様こそ、お元気そうで……」

ここまでやってきたものの、昔と変わらないリアーシャ様に戸惑い言葉がそれ以上出てこない。

そんな私に気付いたのかリアーシャ様は苦笑いと言った感じで話を続けた。

「……なぜ、私がここに来たのかを聞きに来たのでしょうか？」

昔の様に話しかけられれば、その内容に驚き目が丸くなる。

「ふふ。相変わらずすぐ顔に出るのね。ジュリアは」

天使のような笑顔でそう言われるとかあと顔が赤くなるのが自分でもわかった。

両手を頬に添えれば、向かいの席ではリアーシャ様の表情が暗くなっている事に気付いた。

「……ごめんなさい。ジュリア」

今にも泣き出しそうな声色に私は思わずリアーシャ様の手を取った。

「いいえ！何か理由があるんですよね？そつでしょう？リアーシャ様」

そつという私の言葉にリアーシャ様はふるふると首を横に振る。

「いいえ。たとえ理由があっても許される事ではないもの。こんなこと・・・大切な友人の幸せを壊す様な事！！」

ぼろぼろと流れだすリアーシャ様の涙に思わず私はそっとハンカチを差し出す。

「・・・リアーシャ様・・・」

15 (前書き)

ちょっと短めです。

差し出したハンカチを受け取るうとはしてくれず、私はリアーシャ様の頬にそつとハンカチで触れる。

そのハンカチでリアーシャ様の涙を拭くとリアーシャ様は私の手を取った。

「・・・ありがとう、ジュリア」

瞳が濡れたままにつこりと笑われるその姿は本物の天使のようだ。

こんな笑顔をもつリアーシャ様がまさかクラウド様に何かを企てるなどと考えた自分が恥ずかしくなった。

「・・・いいえっ！私の方こそ謝らなければ・・・」

そう言いかけて言葉を詰まらせる。

そんな私にリアーシャ様は言葉を続けた。

「・・・ジュリアには辛い事をしてしまっているかもしれない・・・
・だけどっ・・・私もここに来てしまった以上は努めを果たさなければいけないわ」

リアーシャ様の言葉にハツと顔を上げると、濡れている瞳が真剣な様子でこちらに向いていた。

「貴方には本当に辛い思いをさせると思うわ。・・・だから、私の事を憎んでも構わない。だけど、覚えておいて？私は決して彼を好きになわけではない事を」

そう言うリアーシャ様の瞳はゆるぎない何かを宿していた。
彼女の言った言葉の意味を考える余裕もなくその瞳で見つめられた
私は思わず顔をそらしてしまった。

「……わかりました……」

そして、そのひと言を言うだけで精いっぱいだった。

「……ジュリア？顔を上げて」

リアーシャ様の言葉に私は失礼だと思っただけでいながら首を横に振る。
こんな顔は見せられない。

「……ジュリア」

再び呼ばれる私の名に私はしびしび顔をあげた。

「……ごめんね」

そう言っただけで先程私がリアーシャ様の涙をぬぐったハンカチで今度は
私がリアーシャ様に涙を拭われた。
困った様に笑うリアーシャ様の笑顔が今の私には辛かった。

リアーシャ様の部屋を後にして戻ってきた自室で私は項垂れる。

「ジュリア様？大丈夫ですか？」

リアーシャ様の話を傍で聞いていたエリーナは心配そうに覗き込んできた。

「……ええ……」

そう答えるものの心は少しも大丈夫ではなかった。

クラウド様の隣りをリアーシャ様に譲る覚悟はできていると思ったのに。

いざそれを本人の口から聞くとしても心が無数の針で刺されるようにチクチク痛む。

「……ジュリア様。もう、正直にクラウド様にお話しされてはいかがですか？」

私の様子を見かねたのか、エリーナは覚悟を決めた様にそう話し始めた。

「クラウド様は決して外見で人を好きになるような方ではございませんわ！1年も傍にいたのはジュリア様です！お心はきつとジュリア様にありますわ！」

その言葉に私は力なく首を振った。

「・・・そんな事わかってるわ。・・・だからこそ私ではダメなのよ」

エリーナに聞こえるか聞こえないかの小さな声で私は言葉を紡いだ。

「なぜですか!?!」

エリーナはしつかり聞きとっていた様だ。

なぜと言われても答えられない。側にいてそれを感じたのだから。いつも笑顔を絶やさず優しくしてくれるクラウス様。

だけど、いつも心のどこかで何かを思っているようだった。決して私では埋められない何か・・・。

エリーナは私が返事をしない事で言いすぎたとでも思ったのだろうか。

慌てて頭を下げた。

「も、申し訳ありません!出すぎた事を申しました!」

「・・・いいえ。心配してくれているのだもの。気にしないで」

にっこりとほほ笑んだはずなのに、エリーナの表情は何だが苦しそうだった。

そんなエリーナに私も苦笑すれば、少し一人になりたいと告げた。心配そうに私を見詰めながらもそれを了承してくれて、エリーナは部屋を後にした。

「・・・どうしよう・・・」

これから、私はどうすればいいのだろう。

側室を召しあげたばかりでこの国を去っても大丈夫だろうか。
何か勘ぐられはしないだろうか。

だからといって、私はお2人の姿を見ていること出来るのか。

「……無理に決まってる」

リアーシャ様の言葉を聞いただけでこんなに胸が痛いのだ。

2人が仲睦まじく寄り添ってる姿などやはり見れるわけがない。

「……誰か……」

私をここから連れ出して……。

ベットにうつぶせになると誰にも聞こえる事無くその言葉はかき消されていった。

そして、誰にも知られる事無く涙を流した私はいつの間にか眠りに
ついていた。

「……リア様……。ジュリア様！」

エリーナの声で目を覚ますといつの間にか外が暗くなっているようだった。

「……もう夜……？」

ふと体を起こしながらつぶやくとそつと体を支えてくれながらエリーナが返事をくれた。

「はい。そろそろお夕食のお時間ですよ」

につこりと笑い答えてくれたエリーナが私の顔を見ると一瞬驚きに変わり今度は苦笑に変わった。

「……ジュリア様。すぐに布をお持ち致しますわ」

そう言つてエリーナは一旦部屋を出た。

なぜ？と、頭を捻るうちにエリーナは再び部屋へと戻って私にそれを渡した。

「……冷たい」

「はい。それで目元を冷やされると宜しいですわ」

やはり苦笑気味に笑うエリーナに言われて、瞼が腫れている事に気付いた。

「……………ありがとう」

エリーナの気遣いに礼を言うとエリーナは首を横に振った。

エリーナは何も言わないが、この顔を見た時点で私が泣いていた事はバレバレだろう。

だけど、何も言わないでいてくれる事が今はありがたかった。

「ジュリア様。お食事はお部屋の方へ運ぶように手配致しましたので、ゆっくりされて下さいね」

いつの間に手配したのか、私の状態をすぐに読み取りそう言った気遣いをしてくれるエリーナに思わず抱きついた。

「エリーナ。いつもありがとう。……本当に、貴方がいてくれると心強いわ」

エリーナの腰をギュツと抱く私はまるで子供の様だ。

だけど、いつも傍にいてくれるエリーナに思わず甘えたくなくなるくらい私の心は弱っていた。

「……………いいえ。私はいつでもジュリア様の為に……………」

そういうとそっと背中をポンポンと叩いて私を落ち着かせてくれた。たった一つ年が上だと言うのに、エリーナはまるで母親の様だった。

「……………私ね……………。やっぱりこの国を出るわ……………」

私はそうポツリと言うとエリーナの手が止まった。

そして、そっと私はエリーナの腰から離され、エリーナは膝をつい

て私と同じ目線になった。

「……かしこまりました。ジュリア様のお心のままに」

そう言うてにつこりと笑ってくれたエリーナに私は再びギュッと抱きついた。

そう、私はさんざん泣いた後決めた。

この国を去る事を。

リアーシャ様はきつとクラウド様を幸せにして下さる。

クラウド様も想い続けたお相手とやっと幸せになれる。

それならば、私はこの国を去った方がいい。

お世継ぎが生まれればすぐに私が去った事も風化されてしまうだろう。

そう考え、私は決心した。

城を出るのは1ヶ月後。

それまでに、私は国に戻るか、他国へ亡命するか決めなければいけない。

その間に私は王妃としての仕事を終わらせ、リアーシャ様に引き継ぐ事に決めた。

すべてを投げ出している民に迷惑がかかるであろう事から。

城へ戻ってきて、リアーシャ様の元へ訪ねて以降はずっと部屋に籠

りっぱなしだった。

その理由はもちろん城を出る為の準備に追われていたから。

祖国に迷惑がかららない様、クラウス様に迷惑がかららない様あちこちに手を回す必要があった。

そんな中、久しぶりにこの部屋へ訪ねてきた人がいた。

「・・・無事で何よりです。貴方がたの活躍は私も伺いました。良くやってくれました。アルバート」

フィーナ国で舞踏会のパートナーとして参加できないと告げられて以降、国の為に働いていたアルバートが城へ戻ってきた報告と挨拶にやって来ていた。

「その節は王妃様に多大なるご迷惑をおかけいたしましたして申し訳ありませんでした」

頭を下げるアルバートに顔を上げるように促す。

「気になさらないで。あなたはこの国の為に働いたのです。謝る事など一つもありません。それよりも、ゆっくり体を休めて頂戴」

にっこり笑うとアルバートは再び頭を下げた。

「はっ！ありがたきお言葉・・・。。。。王妃様・・・。」

お礼を言って下がるはずのアルバートが私を呼びとめた。
その事に少し嫌な予感はしたのだ。

「・・・何かしら？アルバート」

「はい。国王より言伝を申し遣っております。本日の午後いつもの時間に執務室へ来るようにと」

そう言うとアルバートは三度頭を下げ、今度こそその場を後にした。私の返事を聞く事無く……。

「……つまり、これは命令ってことね……」

零れる溜息。

私はいよいよクラウド様に会わなければいけない事実には肩を落とすしかなかった。

城を離れる準備はもちろん、体調が優れないからと言ってクラウド様を避けていたのも事実だった。

「……いつかは呼び出しが来るとは思っていたけれど、いざ本当にそうになるとなかなか覚悟が決まらないものね」

誰にも聞かれる事無く一人苦笑と共につぶやく言葉に思わず本音が紛れ込んだ。

しかし、どちらにしても会わなければこの先話は進められない。

「エリーナ！」

そう言ってエリーナを呼ぶと私はいつもの様に鏡の前に座った。

「……ジュリア様？どちらかにお出かけでございますか？」

傍にやってきたエリーナは不思議そうに鏡越しに私を見つめた。

「ええ。クラウド様から呼び出しがあったわ。あのメイクでお願い」

それを聞くとエリーナは少し顔を引きたらせたが、すぐにメイクの準備を始めた。

「クラウド様。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

クラウド様の部屋に入ってすぐに私は頭を下げ、これまで会わなかった事を謝った。

「……ジュリア……」

仕事をしていたであろうクラウド様が固まったのが見ていなくてもわかった。

「……本当によろしいのですか？」

エリーナは私が部屋を出る前にそう聞いた。
それもそうだろう。

今の私はリアーシャ様の姿をしていたわけではないのだから。

「いいのよ。話せばわかってくれと言っていたのは貴方でしょう？」

にっこりと笑いそういうが、エリーナは心配でしょうがない様だっ

た。

「・・・私も、嘘をつく事に疲れたの。最後になるのなら、きちんと本当の事を知っていて欲しいのよ」

そう言っただけでなんとかエリーナを宥めクラウド様の元へやってきたのだ。

「クラウド様。大事なお話があります。少し私の為にお時間頂けますか？」

そう言っただけで顔を上げるとクラウド様はハツとしたように私にソファへ座るように促した。

いつもの指定席・・・ここに座るのもこれが最後になるだろう。そこに腰かけると、クラウド様の侍女が用意したお茶が目の前に置かれた。

それを手にして、一口口に含んで自分を落ち着かせる。

「・・・ジュリア」

目の前に座るクラウド様が私の名を呼ぶ。

私は、手にしていたカップを元の位置に戻すとスッと背筋を伸ばししっかりとクラウド様の目を見て口を開いた。

「・・・驚かれましたか？でも、これが本当の私なのです。今まで騙っていて申し訳ありませんでした。これから、全てをお話致しますわ」

そう言つて、にっこりとほほ笑むとクラウス様は口を閉じ、無言で私に先を促した。

私は、これまでの経緯を全て話した。

途中何度も言葉に詰まりながら・・・。

「・・・私はあるべき姿に戻る事に決めました。これ以上嘘をつく事が辛くなつたのです。傍でお2人の姿を見ることにも耐えられません。いままで、本当に申し訳ありませんでした。私がこんな事をしなければお2人はもつと早くに出会えていたはずなのに・・・。クラウス様・・・本当に愛していらっしやる方とお幸せになつて下さい・・・」

そう言つて席を立とうとした。

が、それはクラウス様によって阻まれた。

「全て知っている」

そのひと言で。

「・・・え？」

思わずクラウス様を見た。

すると、クラウス様の鋭い視線が私に突き刺さる。

今まで見ていた優しい瞳ではなく、怒りでいっぱいになった瞳。クラウス様を纏う空気がまるで震えているようだ。

そんな彼に思わず私は竦みあがった。

「・・・ジュリア」

今まで聞いたこともないくらい地を這う様な低い声。

クラウド様が席たつてこちらに近づいてくるが私は動けないでいた。

「ジュリア」

隣りに座りそつと私の頬を撫でる。

「は、はい・・・」

声が裏返っていたが今はそれどころではない。

なぜだか、クラウド様の視線をそらせずにいた。

「お前は、私を甘く見すぎている」

顔を近づけられ、耳元でそう囁かれるとなぜだか背筋がぞつとする。

「この1年お前は私の事をまったく信用していなかったのだな」

ふと離れたクラウド様の存在にほつと胸をなでおろすのも束の間、
今度は手を取られてそつと口づけられる。

吃驚してその手を引きもどそうとするがそれを強く握られ阻まれる。

「・・・放さないと言つたはずだ」

その言葉にクラウド様を見るとその瞳に怒りはなかった。

「・・・クラウド様・・・？」

そつとクラウド様の名を呼ぶと彼は私の手を離し盛大に溜息をついた。

「っはあああああゝ……………お前はどこまで私の事を信用していないのだ？」

クラウド様の言っている意味がわからず思わず首をかしげる。その姿を見たクラウド様が再び溜息をついた。

「…………一度会えばそれがリアーシャではない事くらいすぐに気付いた」

その言葉に私は目が飛び出してしまうのではないだろうかと思うほど吃驚した。

「当たり前だろう。人を見る目は嫌と言うほど養われているのだ。見てわからない訳がないだろう……………」

呆れたようにそつというクラウド様に私は思わず言葉が零れた。

「で、でも！あの時はそんな事一言も……………!」

我が家へ訪れた時には何も言わなかった。

「…………あれは……………お前に一目ぼれしたのだ」

今までの勢いはどこへやら？最後の言葉に自分の耳を疑った。

「……………は？」

私の反応にクラウド様は顔を真っ赤にさせながら叫んだ。

「……………っ！彼女を守ろうとしているジュリアに一目ぼれしたのだ！……！」

その言葉を理解するまでにしばらくかかった私は理解したと同時に思わず叫んでしまった。

「……………えええっ！？」

その叫び声を聞いてエリーナが国王の執務室であるのにもかかわらず飛び込んできた。

「ジュリア様……！」

勢いよく扉を開けば、エリーナの目に映ったのは真っ赤になった2人が仲睦まじく手を握り合い慌てていた。

「……………ジュリア様？……………クラウド様？」

訳のわからないエリーナに、クラウドはいち早く自分を取り戻しエリーナになんでもないと言つと再び外で待つようにとその場から追い出した。

「……………はあ。ジュリア。私はこれまで嫌と言つほど色々な奴を見てきた。私に媚びへつらう奴も、私を殺そうと企んでいる奴も……………。そんな私が気付かないわけがないだろう？」

「で、でしたら、なぜ……なぜ、それをおっしゃってはくださらな

「かったですか？」

クラウド様の言葉に私は思わずクラウド様に掴みかかる勢いで問い詰める。

「それは……………お前を手放したくなかったからだ」

ぼそりとつぶやくクラウド様に私はもう何も言えなかった。

「必死にその事を隠そうとしているお前をみてしまうと何も言えなくなつた。それに……………それを気づいていたと知つたらお前が国に帰ると言いだすかと思つていた。……………情けないな。国の事ならば即座に結論をだせるのに、お前の事となるとどうしても戸惑つてしまう。もし、国に帰りたいと言われたら？知つていた事を知られて嫌われてしまったら？そう思うとどうしても言えなかった……………。事実、お前が離縁したいと言い出した時は、思わず鎖で繋いで私の部屋から出さないでおうかと思つたくらいだ……………」

最後は聞き捨てならない事を言われた様な気がしたのだが、そう言つて頭を垂れるクラウド様を見ていると思わず手を伸ばしてしまつた。

しかし、その手を取られると獲物をとらえた様な眼で私を見ていた。

「ク、クラウド様！！」

思わず手を引つ込めようとしたが強く握られそれも叶わなかった。

「……………ジュリア。信じてくれ。私は君が好きだ。ジュリア・エルステラを愛している」

まっすぐに見つめてくる瞳は、クラウド様の想いを物語っていた。

「…………クラウド様…………。わ、私も…………愛しております」

こみ上げる想いと共に頬を伝って流れる涙を、クラウド様はそつと拭って私を抱きしめた。

「愛している。ジュリア。これからも私と共にあってくれ…………

」

クラウド様のぬくもりが消えたかと思うと、唇にそのぬくもりを感じた。

全てが解決した今、その温もりはいつも以上に優しく心に染み渡っていった。

ふと、目を覚ますと見慣れた部屋。
思わず勢いよく起き上がって周りを見渡した。

「……………夢……………?」

ポツリとつぶやいた自分の言葉に思わず肩を落としてしまう。

「そ、そうよね……………。そんな事……………」

あるわけがない……………と続けようと思ったが、それを遮られた。

「起きたか?」

聞こえた声に思わず顔を上げると、扉から部屋へ入ってくるクラウス様の姿がそこにあった。

「ク、クラウス様……………」

「なんだ?まさか昨日の事が夢だとも思っていたか?」

はははと笑うクラウス様の笑顔はいつもの様に優しい。
そして私のいるベットまで来ると傍に腰かけた。

「……………ジュリア……………おはよう」

頬を撫でるクラウス様の瞳には私への愛情が感じられた。

「……クラウド様……」

再び私の目には涙が溜まっている。
昨日の事が夢じゃなかった。
その事に涙は止まらなかった。

「……昨日から泣いてばかりだな」

そういうと、困った様な笑顔で私の涙をぬぐった。

「ジュリア。君が用意させた荷物はすべて元へ戻す様に指示した。
もうここを出て行こうなんて思っていないだろう？」

クラウド様の言葉に私は静かに頷いた。

クラウド様の気持ちを知った今、傍にいたいと思う気持ちは止めな
くてもいい。

そう思うと、止まりかけていた涙も再び溢れだす。

「泣き虫なのだな、ジュリアは。……これから、お互い色々な事
を話し合っていこう。本当のお前をもっと知りたい」

クラウド様はそつと私の額に口づけを落とし、スツと立ちあがった。

「今日はゆっくり休みといい。夜、また来る」

そう言い残すと先程の扉から出て行った。

流れ出す涙は未だ止まらなかったが、心はとても満たされていた。

「……ジュリア様」

扉の向こうからエリーナの声が聞こえる。
涙をぬぐい、一つ咳払いをすると私は答えた。

「……入室を許可します」

その言葉を言い終わるとそっと扉が開いてエリーナが顔をのぞかせた。

「おはようございます」

扉の前で頭を下げるエリーナ。

「エリーナ……」

言葉を紡ぐとすれば再び涙がこみ上げてくる。

「……何も言わなくて結構ですよ。良かったですね！ジュリア様
！！」

頭を上げたエリーナの顔は満面の笑みだった。

「あ……ありがとうございます……」

溢れだす涙に、思わず顔を両手で覆ってしまった。
すると、そっとその手に合わさる温もりを感じた。

「……ジュリア様。泣いてばかりではダメですよ？せつかくの幸
せが逃げてしまいますからね」

そう言うエリーナの声が少し震えていた事に気づき、私はそっと顔

を上げる。

すると、エリーナの目にもきらりと光るものを見た。

それでも、にっこりと笑っているエリーナを見て、私も笑顔を返した。

朝はあまりの出来ごとに信じられない思いだった。

ただどやっとな気持ちも落ち着きゆっくりお茶を飲んでいた時だった。

「これからは本当のご夫婦としてクラウド様と暮らしていけますね！」

エリーナが嬉々として話している。

「本当の夫婦……」

「ええ！そうですわ！心が通じ合ったのですもの！何も心配いりませんわ！」

自分の事の様に喜んでくれるエリーナに私も思わず笑顔になる。

「ありがとう……。貴方にはいつも迷惑ばかりかけてしまっていたものね」

「いいえ！迷惑だなんてとんでもないですわ！本当のジュリア様を

愛しておられたとは国王様も見る目がありますね」

その言葉に思わず頬が熱くなる。

「ふふふ、ジュリア様。お顔が真っ赤ですわ」

「も、もう！からかわないで頂戴！エリーナったら……」

そんな事を言っていた時だ。

扉からノックの音が聞こえた。

「まあ！もしかしたらクラウド様が待ちきれなくて戻ってこられたのかもしれないわ！」

そんな事を言いながらエリーナはスキップでもしそうな勢いで扉へと向かった。

「……もう。エリーナったら……」

私はさつきからあの調子のエリーナにやられっぱなしだ。

頬が赤く染まるのも今日は何度めだろう。

ぱたぱたと手で熱くなった顔を仰いでいると、エリーナが戻ってきた。

「……ジュリア様」

先程までのエリーナの声色とはあきらかに違っている。

その声色にエリーナの方に視線をやると少し青ざめた様なエリーナが立っていた。

「……………どうしたの?」

「……………り、リアーシャ様が……………」

リアーシャ様……………。

その名を聞いたときにハツとした。

あまりに浮かれていたのだろう。彼女の存在をすっかり忘れていた。

「……………リアーシャ様がどうされたの?」

青ざめた顔色のエリーナをみて、なんだか嫌な予感がした。

「……………ご自害なされたそうです……………」

エリーナの言葉に私は頭が真っ白になった。

「……………え……………?」

「……………幸い、発見が早く命に別条はないと言っ事ですが、お怪我をされているとの事で……………」

エリーナの手が震えていた。

「……………リアーシャ様が……………自害……………」

頭の中に響くその言葉に私はその場から動けなくなっていました。

心臓の音がこんなにも聞こえる事なんてあっただろうか？
自分の足音がどこか遠くの方でなっているかのように聞こえる。

「ジュリア様！落ち着いて下さい！！」

後ろから追ってくるエリーナに手を掴まれてハッと我に帰る。

「はあっ、はあ………。ジュ、ジュリア様……。リアー
シャ様は今眠っておられます。今伺われるのはいかなものかと
っ……。」

先程、エリーナの言葉を聞いてから、無意識のうちにリアーシャ様
の部屋へと足を進めていた。

「あっ……。そ、そうね……。っ。」

手首をつかんでいた手が離れる。

エリーナは息を整えると私の方を向いて言った。

「ジュリア様。とにかく一度お部屋にお戻りください」

そう言うとエリーナはそっと私の肩を支えてくれた。

「……。私のせいだわ……。」

そのひと言ですべてを察したのか、エリーナは目を開き首を横に振
った。

「いいえ。ジュリア様の所為ではございません。思い出してください。リアーシャ様は国王様を好きなわけではないとおっしゃっていただけではありませんか」

「……いいえ……。それは、きっと私の為に思って言って下さった事だわ……」

私はあの時に言われた言葉を思い出していた。
心の綺麗な方。

あの方ならばきっと私の為にそういったに違いない。

「……そうでしょうか……」

エリーナはなお私の言葉を否定する。

「そうよ！……そうでなければ、なぜ……なぜ、王族のリアーシャ様が側室などになると言うの！？そんな事あっていいはずがないのに！！」

リアーシャ様の事を一瞬でも忘れてしまった自分の情けなさにどんどん募る感情があふれ出して止まらない。

「……ジュリア様……」

「……申し訳ございません。出すぎた事を申しました。……とにかく、今はお部屋に戻りましょう」

エリーナは頭を下げると、私を支えたまま部屋へと急いだ。

私は、心の中に渦巻く自分の感情をどうすればいいのかわからなか

った。

尊敬していたリアーシャ様が自害をされたと言う事実にも
自分の所為だと思えなかった。

だからといって、もうクラウス様を譲ることなど考えられない。
それなのに、リアーシャ様に幸せになつてもらいたいなんて甘い事
を考えている。

自分がリアーシャ様から奪つたのに……。

気づけば、頬に冷たいものが伝つていた。

私に泣く権利なんてないのに。

そう思うと、泣いている事さえ情けなくなる。

「ジュリア様！そんなにお顔をこすられたら……！！！」

涙を流す資格のない私は想いきり袖で涙をぬぐつた。

それを横から止めようとするエリーナの手を振り払つて。

「いいの！！ほつておいて頂戴！これくらい何！？リアーシャ様は

もっと酷い傷を負つていらっしやるのよ！それなのに、私は……

……！！！」

情けない情けないっ！

「……やっぱり、私がここにはいけないの？……」

ふと、力が抜けると無意識のうちにぼつりと言葉がこぼれ落ちる。

「そんな事あるわけないではありませんかっ！！！」

思い切り否定するエリーナの言葉に思わず眉を寄せ私は反論しよう
とした。

「ただ、その瞬間聞こえないはずの声が聞こえた。」

「侍女の言うとおりだ」

ふと、振り返るとそこには今朝見た姿のままのクラウド様がアルバートとともに立っていた。

「ジュリア。約束しただろう？私と共にある事を。その約束をもう破るつもりかい？」

クラウド様の言葉に止めた涙が再び溢れだしそうになる。

「……クラウド様……」

エリーナはクラウドの登場に目を丸くしながらも、私の傍を離れ頭を下げていた。

そんなエリーナの横を通り過ぎクラウド様は私のすぐ傍までやってきた。

「ジュリア。リアーシャの事は心配するな。命に別条はない。少し手首を切っているが傷は深くないし、直に良くなる。……ただ、君はすこし彼女に会いに行く事を控えなさい。彼女の心を想えば時間置く事が大切だよ」

ポンと頭の上に置かれた手のぬくもりに喜びを感じながらも、クラウド様の言葉に愕然とする。

「……リアーシャ様が私に会いたくないとおっしゃったのですか……」

当然かもしれないがその事に酷く心が痛む。

「そうじゃない。彼女は何も言わない。ただ、今はそっとしておいてやろうと思う。彼女の事は私達にまかせて、君も少し休んだ方がいい。・・・いいかい？この事は君のせいではない。自分を責めたらいけないよ？」

そういうと額にキスを落としてクラウド様は来た道に戻っていく。クラウド様の姿が遠のくのを確認して、クラウド様の後に続くこうとしていたアルバートを引きとめた。

「アルバート。待って」

どうしても聞いておきたい事があった。

「・・・本当の事を教えて頂戴。やはり、リアーシャ様は私に会いたくないと・・・」

最後まで言う前にアルバートが言葉を重ねる。

「いいえ！それはクラウド様のおっしゃったとおりです！・・・彼女は今、何も話されないのです。どうしてもこんな事をしたのかも・・・」

アルバートはそこまで言うと、再び頭を下げたクラウド様の去った方へ走り去った。

「・・・ジュリア様・・・」

私たちのやり取りを見ていたエリーナはそっと私の傍によって再び

肩を支えてくれた。

「…………エリーナ……。私……」

「ジュリア様。大丈夫ですよ。……国王様もおっしゃっていたではありませんか。とにかく、今はお部屋に戻ってゆっくりお休みください」

そう言われ、私はエリーナに肩を抱かれながら部屋へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190w/>

王妃の秘密

2011年11月16日21時14分発行